「後集団」概念と「汎神論（広義の神道）」の射程　その２

――『ヲシテ文献』における大嘗会（悠紀殿・主基殿での共饌の儀）と「スズカ（欲しを去る）のミチ」の朗詠、そこから現代社会の混迷を読む――

森田成男（社会・経済システム学会会員）

はじめに

平成 2（1990）年 11 月に、大嘗祭で悠紀殿（ゆきでん）共饌（きょうせん）の儀に臨まれる天皇の、厳粛なお姿と尊い式次第を映像で学ばせていただいた。そして、令和元（2019）年 10 月には、即位礼正殿の儀として、新天皇が、荘厳な高御座（たかみくら）から即位のおことばを読みあげられるのを、歴史の重みを感じながら見せていただいた。

大嘗会などを考察するのは誠に畏れ多いが、先学に導かれつつ古代のすがたを仰ぎ、引き継がれてきた祭祀と伝統儀礼の本来の意義を少しでも明らかにしたい。

『ホツマツタヱ』は、縄文時代の「カミヨ」を経て、タカミムスヒのヒタカミ統べの始まりから「カミヨ」までの 28 章が、臣の天種子（アメタネコ：アマノコヤネの孫にあたる）によりタケヒト（神武天皇）に、その後「ヒトのヨ」の 12 章を加えた全 40 章が、三輪の臣・スエトシ（オオタタネコ）からヲシロワケ（景行天皇）に献上され、5・7 調で建国の歴史やノト（祝詞）の思惟などを詠っている貴重な文献である。

『先代旧事本紀』巻第七の天皇本紀上の神武天皇の御代にも、「天種子命、天神寿詞（あまつかみのよごと）を奏す。即ち神世の古事（ふるごと）の類、是なり」と記載されている。

とりわけ、その『ホツマツタヱ』第 27 アヤなどには、ヲシテ文字で、「ユキスキノミヤ（悠起・主基の宮）・・・・ナメヱニツゲテ　ヒトクサノ（嘗会に告げて　人草（国民）の）ホギイノルナリ（祝ぎ祈るなり）」と、私たちにとって根本的に重要で、厳粛なる 5・7 調の朗詠が出てくる。

そこで今回は、『ホツマツタヱ』の 13、22、23、27、28 アヤと『カクのミハタ』における宮中の祭儀や、独自の太陰太陽暦の存在、大宇宙哲理の体系的伝承を整理・解説しながら、大きな視点から、現代社会の立ち位置を明らかにしていく。

具体的には、『記紀原典ヲシテ　増補版（上下巻）』を底本とし、読者が『ヲシテ文献』を検証できるように原テキストの行数番号を記載した。（　　）内に大意・要約を簡潔に述べながら進んでいく。また、より説明が必要な箇所には、【　　】内に補注をつけておいた。

後半は、「スズカ（欲しを去る）のミチ」他の観点から、現代社会の構図を問うていく。

１、日本と北米先住民の精神文化、「スズカ（ススカ）のミチ」の視角
２、第 13（ワカヒコ　イセスズカのアヤ）、アユキワスキ（天悠紀地主基）の祀り主
３、第 22（オキツヒコ　ヒミツノハラヒ）、第 23（ミハサダメ　ツルギナ（剣名）のアヤ）
４、第 27（ミヲヤ（御祖）カミ　フナタマ（船魂）のアヤ）
５、第 28（キミトミ（君臣）ノコシノリ（遺し法）のアヤ）、マサカキからアスス暦へ
６、『カクのミハタ』の「トシウチニ　ナスコトノアヤ」、トはノトウタ（祝詞歌）の初め
７、「戦後の知的空間」の劣化の原因を考える

８、国民の富が流出するように改造の「新自由主義」の施策
９、民営化・株式上場とシニョリッジ権（基軸通貨特権）との関係
１０、世界を読み解く理念型の「軍産学メディア複合体？」の考察
以上の順に、『ヲシテ文献』のヲシテ文字による、ありのままの叙述を主人公にして、前半は多彩な内容を紹介する。と同時に、後半では、良質な「コミュニティの基盤」が、新自由主義の施策により、分解に瀕している現状の構図を読み解いていく。

１、日本と北米先住民との精神文化、「スズカ（ススカ）のミチ」の視角

物欲に拘泥（こうでい）しない生き方、物欲から自由になる考え方をスズカ（ススカ）という。次の第 2 章で詳述するが、本来から、人間存在はそのタマシヰ（魂しい）の本体のタマは、アメ（大宇宙）の中心から来たって、また元へ戻るのであるから、必要以上の物欲に取りからめられてしまうのは、まったく愚かなことだと考えられていた。
広義の社会的規範と伝統的思惟という根本的なものが、縄文の『ヲシテ文献』の時代から奈良・平安時代を経て、江戸時代から明治・大正・昭和へと一貫して続いている。
源頼朝（1147～1199）は、京都から公家の学識者たちを直接に招き、すぐ前の平清盛、並びに院政時代の政治行政を参酌して、新しくもっと簡素な政治行政の形態を整えようとした。
北条政権は、さらにこれを精緻に進め、武家政権における真の文武両道の道を探り当てようとした。川瀬一馬は、遠い時代から流れる、文武両道をきわめる伝統をこのようにとらえる。
「北条泰時に至っては御成敗式目を制定、武家政治の軌範を確立し得て、武家文化の基礎を明白にしました」。そして、「金沢北条家は実時・顕時・貞顕と三代にわたって、みずからも書写に努めて熱心に（古今東西の書籍を）蒐集しております」。
国民にとっての善政とは何かを常に求道し、平時より、武道と学識と目測能力を錬磨していた。蒙古襲来時の執権北条時宗、及び武士団の、決断と瞬時の対応が迅速・果敢であったのは当然のことである。時代は下って、後には、水戸光圀もまた、古代の歴史資料の蒐集に努め、『大日本史』編纂の大業をわが国に遺したのである。　（川瀬、2019、23‐76）
さて、神社の起源をたどっていくと、縄文時代の祖先の祭祀に行き着く。一般的に、古来より、日本においては、宇宙万物は山川・草木・動物をも含めて、すべてが大宇宙の分霊、分身であることを了解していた。
ベーリング海峡は、先史時代には陸続きであった。北米大陸の先住民は、もとアジアから渡って永い年月の間、住んでいた。日本列島と同様に、北アメリカでも、いたるところで古代の遺跡が発見されている。
昨年の『アメリカス研究』第 25 号（完全版）において、日本文化の本質に水面下で関係している、北米インディアンのヤナ族の、イシという人物の生涯を描いたノンフィクション物語にふれた。
その際の要点は 3 つあった。1 つ目は、一般的にほとんどの民族集団では、遠い祖先からの伝承が親から子へと受け継がれ、歌謡・叙事詩をもっていること。地名や登場する神々の名前と物語のなかに、彼らが森羅万象を手なずけ、自然の猛威の中でやっと生命を現代までつないできた、生活技術や生存の知恵継承の工夫や創意の痕跡が隠されている。
2 つ目は、私たちが代々つねに神社に参拝し、参道の手水舎で口と手を水で清めて、きれいな気持ちで拝殿に向かう習慣や、けがれをはらうために、日常ふつうに井戸や近くの川で水浴

びして身を清めていたように、イシのヤヒ族も水を浴びる生活習慣がみられたこと。

3 つ目は、イシのノンフィクション物語の著者 T・クローバーが指摘するように、モンゴロイド種の先住民たちには、大自然を敬い、万物に霊宿るの「汎神論」的思惟が、広範囲の地域で主流であった点が重要である。それは本稿の、縄文・弥生時代の日常生活を朗詠する。わが国の『ヲシテ文献』の高度な大宇宙哲理の体系と密接に関係している。

じつは近年、『記紀』の叙述の原典（景行天皇の御代までに限って）であることが分かってきた『ヲシテ文献（ホツマツタヱ、ミカサフミ、カクのミハタ）』には、わが国が保持する宮中祭祀と伝統儀礼、日本社会の伝統文化、及びノト（祝詞）の原型に通じる日本的思惟の根幹についての朗詠が満載である。

1936 年から約 4 年間、東北大学で教鞭をとった（ハイデッガーの系譜につながる）カール・レーヴィットは、『世界と世界史』（1959）で、古今東西の思潮の核心をついた「人間世界の祝福の本質」を、こう表現している。

「哲学する人は、事物がそのようにあって別のようにあるのではないということに驚異することができる」。「驚異は、当然なことながら、なかんずく可視的な世界の驚くべき事実、太陽の規則的な運行、月の盈虧（えいき）と星の運動、一般に天界、そして地上で発生し消滅しながら生きている一切のもの、に向けられる。それに属するものとして忘れてならないものは、「人間」という驚くべき事実であり、人間とともに与えられた「驚異の可能性」そのものである。驚異すべきものに対する驚異は、そのものからある距離を保つ。それがすべての純理論的知識（筆者注：大宇宙哲理）および認識にとって本質的なものである」。（レーヴィット、1959）

人間存在を取り巻く神羅万象の生々流転と「驚異の可能性」について根本的に考え、体系的に朗詠した、驚異的な古文献がわが国に存在している。

学問の王道は、当然に、原テキストを原文で解読していくことである。『ヲシテ文献（ホツマツタヱ、ミカサフミ、カクのミハタ）』の先行研究では、ヲシテ文字写本の書誌学的整理・校合で底本を確定し、原文の朗詠の解読を進めてきた池田満たちの、盤石の業績が築かれている。

天理図書館へも、佐々木信綱博士からの系譜で、戦後に『ホツマツタヱ』の関係資料がもたらされている。国語史学（大矢透・橋本進吉・浅野信・有坂秀世・大野晋・大坪併治たち）の知見から指摘されてきた基本的な側面が、概ね『ヲシテ文献』に貫通していること。そして、『ヲシテ文献』が和歌の起源であり、人間存在の被拘束性を包み込む壮大な大宇宙哲理の体系をもつことを、2020 年の『アメリカス研究』第 25 号で論じた。

その続編の本稿においても、ヲシテ文字の「オ」と「ヲ」、「イ」と「ヰ」、「エ」と「ヱ」の「同音異字」の違いに注意しながら、原文の「　　」内に、原テキストのヲシテ文字そのままを掲載した。『ヲシテ文献』写本には、大別して、古くまで遡れる内側濁音と、書写伝承時代に付加されてきたとみられる外側二点濁音の表記がある。

縄文・弥生時代においては、「オ」と「ヲ」の当時の運用は、あいまいな側面があり、現代語への転換の際には、しばしば「オ」が「ヲ」となることに、本稿で読者は気づかれるであろう。また、数詞として〔ヒ・フ・ミ・ヨ・ヰ・ム・ナ・ヤ・コ・ト・モモ（百）・チ（千）・ヨロ（万）・マス（十万）〕が頻繁に出てくる。ただし、数詞の五は、後の漢字文献に残るア行の「イ」の表記ではなく、『ヲシテ文献』の叙述では、ヤ行の「ヰ」で表されている事実である。例えば、「五人組」の叙述では、「ヰヤ（五軒の家）クムヲサ（組む長）ハ」などと表記されている。

国語史学において、平安時代以降の仮名遣いでは、格助詞「ヲ」を「オ」と表記することはないので、逆にその事実が、記紀よりもはるか以前に『ヲシテ文献』が成立していたことを示

している。

また、近い将来に、ヲシテ時代末期の日本列島の各古墳の築工年代が、もう少し正確に確定されてくれば、「アススのコヨミ」（本稿の 5 章と 6 章で解説）と整合していくことが可能となってくる。

それに関連して、『ヲシテ文献』の宇宙観と銅鐸の祭祀、銅鏡の葬送儀礼については、「『ヲシテ文献（ホツマツタヱ他）』と銅鐸、銅鏡、の相互関係性を読み解く」（2021）の論考で、縄文時代の「五人組」やミヤコドリに譬えての「頭はキミ、左右のツバサは臣、足のモノノベ」と言う、古代の組織編成の叙述の考察については、「法制史の視角から、『ヲシテ文献』、『延喜式』他を考察する」（2021）の論考で、注目点を論じた。　（森田、2021e、2021f）

塙保己一（はなわほきいち 1746～1821）の『群書類従』（1819）や、山片蟠桃（やまがたばんとう 1748～1821）の『夢ノ代（ゆめのしろ）』（1820）などが世に出てから、今年で二百年の節目である。

水戸藩藩主徳川治保（はるもり）より、幕府へ『大日本史紀伝』が献じられた年も 1819 年であった。その前年には、すでに英国のゴルドンが浦賀に来航し、貿易を要求したが、徳川幕府はこれを拒否する。海外では、スペイン、ポルトガル、及びナポリで革命が勃発した前後であり、列強諸国による弱肉強食の、激動の世紀への幕開けでもあった。

日本が明治維新を乗り切った背景には、西尾幹二たちが指摘するように、「江戸幕府が清朝や李朝のような文民官僚支配ではなく、相当に官僚化していたとはいえ、まがりなりにも武家政権であったことにある。軍事的危機に臭覚鋭く対応できた所以である。しかし、さらに付け加えねばならぬ重要事がある。幕府が武家政権であったことは、日本の場合には武士の倫理観ということもあいまって、世界の他の文明ではあまり例をみない内発的な体制変革を可能にした点である。（中略）明治維新は一種の革命であり、指導者層の入れ替えということを思い切って行った点において、断絶方式を意識的に採用した自己変革であったといえるだろう」。

しかし、このときの私たちの文明開化は、大きな落とし穴、すなわち植民地拡大の激戦の渦に巻き込まれることでもあった。欧米列強及び国際金融集団との遭遇は、日本の「文明開化が、また同時に悪魔とのつき合いの始まりであった」ことを示している。

そもそもの「万国公法」とは、「もともとヨーロッパ中心主義の、そしてヨーロッパ人にとって自己の戦争を優位にかつ合理的に展開するためのルールづくりとしてつくられた国際法であった。これはその底に彼らが異教徒を蔑視しコントロールしようとする術をどこかで必ず内包していたに違いない法的規制であった。（中略）考えてみると、すでにしてこのとき日本人は、大きな錯誤の轍（わだち）の中にはまってしまっていたのかもしれない」。（西尾、1999＝2017、384‐415）　明治期を迎えた、当時の日本人には、その欧米列強の極端な自己本位の二重性は、その時点では、まだまったく見えていなかったようだ。

その赤裸々な構図を 1948 年に世界中に問うた、エマニアル・マン・ジョセフソン博士の見立てのほんの一部を後半の章でふれる。「国連は、石油カルテルの道具」としてつくられたなど、共産圏と自由世界圏に今も続く奇妙な対立となれあいの「虚構」の裏構造を読み解いている。

本稿は『ヲシテ文献』の価値を知らしめ、その背後にある大宇宙哲理（汎神論）の厳粛なる普遍性に言及するのが第一の主眼である。その次に、国民と国益を守る「国家理性」の立場から、現代社会が国民全体の繁栄、すなわち「ヲヲヤケ（公益）」の指標で運営されているかどうかを考察していく。

栗本慎一郎は、経済企画庁（当時）の副大臣の際、スタッフの協力を得て、世界中で浮遊す

る総資金量（タックスヘイブンを含む）を詳細に調べた。膨大な資金量が地球上に存在しており、《新自由主義》グローバル・スタンダード化とは、国民と国家の資産・財貨をほんの一部の（海外の金融財閥・世界権力の）グローバル資本に売れるように標準化しようという、「売国」運動であることを述べ、国民に警告した。「国を「買う」のではなく、「飼って」生かしておいて、金を搾り取るメカニズムが「新自由主義」である」。（栗本、2005、123 - 142）

『ホツマツタヱ』で朗詠されている古神道の思惟、すなわち「吾足るを知る」ところの「スズカ（欲しを去る）のミチ」や、「イセ（仲むつましい男女）のミチ」から、もっとも遠いところにあるのが、強欲で自己本位の欧米流の「新自由主義・市場原理主義」であろう。

この現代社会の立ち位置については、後半の 7 章以降で、見取り図を提示・検証していく。

尚、『ヲシテ文献』の朗詠は、漢字渡来以前の時代のヤマトコトバであるから、後の時代の漢字名の地名も、森羅万象を対象とした諸概念においても、漢字熟語は関係がない。

したがって、池田満以外の先行研究者たちの、往々にして安易で過度な漢字交じり文での現代語訳は、本来のヲシテ文字の表現している高度な意味内容を変じ、偽書づくりとなりかねないことへの自戒が必要である。誤訳につながる漢字概念の多用と、漢字文化のカスミや雲のかぶさりを極力しりぞける、池田満の観点に立つのが、筆者の立場である。深い意味の概念のヲシテ用語などは、ヲシテ文字のまま（カタカナ表記）が多いことをご理解いただきたい。

本稿での原テキスト解釈については、この分野で 50 年間考究してきた池田満氏の査読を受けてあり、高度な思惟体系の朗詠を味読していただきたい。（ただし、解釈の責はすべて筆者にある）　先ずは、私たちの国のカタチの基底にある思惟、『ホツマツタヱ』の「ワカヒコ　イセスズカのアヤ」の朗詠の内容をみていこう。

２、第 13 アヤ（ワカヒコ　イセスズカのアヤ）、アユキワスキ（天悠紀地主基）の祀り主

それでは、『記紀原書ヲシテ　増補版　上巻』（2021）を底本とし、まずは『ホツマツタヱ』第 13 アヤの行数番号 22139～22152 の叙述から読んで行く。（原文はヲシテ文字である。5・7 調の文章）　尚、読者の理解の便のために、原テキストと訳文に対応させて、叙述ごとの大事なキーワードにアンダーラインをほどこしておいた。

「<u>イセ</u>オコフ　カスガトクナリ　<u>イモヲセ</u>ハ　ヤヲヨロウヂノ　ワカチナク　ミナアメツチノ　ノリソナフ　キミハアマテル　ツキニナリ　クニカミハソノ　クニノテリ　タミモツキヒゾ　メニホアリ　ヒスリヒウチハ　ツキノヒゾ　ヲニミズアリテ　モユルホノ　ナカノクラキハ　ホノミヅヨ　メヲトタガエド　カミヒトツ　ヨヲトハヒナリ　ヨメハツキ　ツキハモトヨリ　ヒカリナシ　ヒカゲオウケテ　ツキノカゲ　メヲモコレナリ」

大意は、（<u>イセ（伊勢の道）</u>を問えば　カスガ（アマノコヤネ）が解いて答える　<u>イモヲセ</u>（夫婦・家の制度）は　ヤモヨロ（八百万）の氏の分かち無く　皆アメツチ（天地）のノリ（規範）備わる。　君はアマテル月日なり　国カミはその国の照り　民も月日ぞ　メ（陰）にはホ（火）あり　ヲ（陽）にミズ（水）有りて　燃える火の　中の暗きは　火の水よ　メヲト（陰陽と）違えど　カミひとつ　ヨヲ（良夫）とは日なり　ヨメ（良婦）は月　月は元より光なし　日陰を受けて月の影　メヲ（陰陽）もこれなり）。

続いて、13 アヤの叙述で、注目点のある行数番号 22319～22339 の箇所を読んでいく。

それに際して「タマ・シヰ（魂しい）」の概念を、少し補足しておく。『ヲシテ文献』の全体

を読んでこそ了解できる大事なことであるが、人の成り立ちは、大きく別けて、タマとシヰとから構成されていると考えられていた。大きな意味でのタマは、意識や記憶・他人を思いやる心・それと良心など。シヰは肉体からくる欲求の食欲や性欲など。タマとシヰとがタマノヲによって結合されて、それに物体が備わって人体になる。タマは人の中心ともいえる。

タマは大宇宙の中心から降ろされてきて、人となって楽しんだ（陽気ぐらし）後に、また大宇宙の中心へと帰っていくと考えられていた。シヰに取り付かれ過ぎたタマは、人が死しても元に還ることができずに苦しむ。理想としては、死して後、早く大宇宙の中心に帰って、またすぐに地球に人として生まれてきて楽しむことこそ良い、と考えられていた。このため迷えるタマを大宇宙の中心に帰すために、タマカエシの祭りを行ったのである。（池田、2020a、248）

それでは、その叙述の行数番号 22319～22339 の箇所を読んでいく。（原文はヲシテ文字）

「ココロスナオノ　ヒトアラバ　ワガコノゴトク　トリタテテ　ミナタストキハ　ホシモナシ　チリトアツメテ　ヨニセマリ　ウラヤムモノガ　カムユエニ　タマノヲミダレ　ミヤナクテ　スエマモラヌオ　タマカエシ　ナセバヲトケテ　ミヤニイル　ナサネバナガク　クルシムゾ　トキニシホカマ　コナキトテ　トエバカスガノ　ヲシエニハ　アユキワスキノ　マツリヌシ　タノミテソレノ　タマカエシ　ナサバクルシム　タマノヲモ　トケテムネカミ　ミナモトヘ　タマシヰワケテ　カミトナル　タフトキヒトノ　コトウマル　ナレドユキスキ　タマユラゾ　スエオヲモヒテ　ムツマジク　ワザオツトムル　イセノミチカナ」

大意は、（心すなおの人が有れば　わが子のごとく取り立てて　皆足す時は　ホシ（欲し）も無し　塵と集めて世に迫り　うらやむ者が咬むゆえに　タマノヲ（魂の緒）乱れ　タマガエシなせば緒解けて　ミヤに入る　なさねば長く苦しむぞ　時にシオカマ（塩釜という人物）　子なきとて　問えばカスガ（トヨケの孫・ココトムスヒ）の教えには　アユキワスキ（天悠紀・地主基）の　祀り主　頼みてそれの　タマガエシなさねば苦しむ　タマノヲも　解けてムネカミ　ミナモト（源）へ　タマとシヰ分けて　カミとなる　貴き人の　子と生まる　なれどユキスキ（悠紀・主基）タマユラぞ　末を思いてむつまじく　業を勤むる　伊勢の道かな）。

【ココトムスヒの父はツハモノヌシであって、ハタレの騒乱を平定後タカノ（現・高野山）に埋め、残るハタレたちをサルサワ（現・奈良県の猿沢池）においてタマカエシのマツリを行った。この時にノリト（祝詞）を記したのが、ツハモノヌシの子のココトムスヒ（カスガトノ）であった】（池田、2020、59 - 61）

この大切な叙述箇所を、池田満は、このように捉えている。

「アモト（宇宙の中心）を創始した元が、アメノミヲヤ（創造祖）ですから、そこで、アメノミヲヤに対してのお祭りを取り仕切って頂くと、大きな期待が持てるのではないでしょうか？　アマカミ（古代の天皇陛下）の即位を祈念し上奏するオオナメエ（後の大嘗祭）はたまにしか、催（も）ようされる機会がありませんが、この時にはアメミヲヤの祭祀ですから、いかなる凝り固まったタマノヲであっても、解き柔（ほぐ）しをする事ができて源のアモトへと、帰る事ができるでしょう。（中略）一般的には、子孫の幸せを思って、夫婦仲良く、生業に努める事こそが、「イセのミチ」の要諦と言えましょう」。　（池田、2021c）

尚、この『ヲシテ文献』に表現されている「タマノヲ（魂の緒）」は、日本の精神文化の基本の概念である。『万葉集七　旋頭歌』や、『新古今和歌集十一　戀』の和歌などにも詠われており、古神道の大宇宙哲理にもつながっている。

さらに、第 13 アヤの続くセンテンス、行数番号 22340～22348 の叙述を読んでいこう。原文はヲシテ文字である。5・7 調の文章）

「コノミチオ　マナブトコロハ　カンカゼノ　イセノクニナリ　チチヒメモ　ノチニハイセノ　ヲンカミニ　ツカエスズカノ　ミチオエテ　イセトアワチノ　ナカノホラ　スズカノカミト　ハコネカミ　ムカフイモヲセ　ホシオサル　スズカノヲシヱ　ヲヲイナルカナ」

大意は、(この道を　学ぶところはカンカセの　伊勢の国なり　チチヒメも　後には伊勢の御カミに　仕え「スズカ（鈴明）の道」を得て　イセ（伊勢）とアワヂ（淡路）の中のホラ（洞）スズカの道とハコネ（箱根）カミ　向かい合うイモヲセ（夫婦）　ホシ（欲し）を去る　スズカの教え大いなるかな)。

この 13 アヤは、伊勢と鈴鹿の語源ともなった由縁、実人生の王道の心構えを、5・7 調で朗詠している。記紀には、この『ヲシテ文献』による、これらの朗詠の記載は見えない。

参考に、池田満が述べるように、その後の 9 代アマカミのオシホミミ様のご崩御ののち、「未亡人になられたチチヒメさまは、イセのアマテルカミにお仕えなさいます。今も伊勢神宮の内宮に、同殿同床で祭られているチチヒメさま（萬幡豊秋津姫命、『延喜式』にも記載）は、没後、ススカのカミとして、現在の三重県亀山市の関町坂下の片山神社に祭られています。

鈴鹿権現と、中世には呼ばれていました。それは、イセ（アマテルカミ）と、アワチ（淡路・イサナギさん）との間の処としての位置と、先に崩御された夫君のオシホミミさんのミササギ（御陵）が箱根であったことから、東西向き合う形の場所として選ばれたのでした。ホシ（目先の欲求）を、どうやって雪（そそ）ぎ清らかな心を保つか？　それが、これこそが、生まれ変わりの正順さを確保する大切な考え方なのでした」。　（池田、2021c）

３、第 22（オキツヒコ　ヒミツノハラヒ）、第 23（ミハサダメ　ツルギナ（剣名）のアヤ）

ヲシテ文字でのキツヲサネ（東西中央南北）と、アミヤ・シナウを合わせてソヒカミと言う。このソヒカミは、わが国の古代における、独自の暦に深く関係している。

池田満の『ホツマ辞典　改訂版』（2020a）が解説しているように、このソヒカミはまたの名として、ウマシアシガイヒコチカミともいう。すなわち、縄文時代から続く大嘗会の時に、アユキとワスキのトノ（悠紀殿・主基殿）を建てて祀る際の、ワスキのトノに祭祀されるカミ（はたらき）でもある。

このカミの主要な働きは、人体のハラワタ（内蔵）及び食糧を守って、人の生命を維持せしむること。そして「キツヲサネ」は方角、アミヤシナウは、暦を編み人々を養しない潤すの意である。そこに兄弟のエトが備わって、暦に 60 進法の「キアエのコヨミ」が運用されてきた。

「キアエのコヨミ」は三音でなり、最初の一音は「キ・ツ・ヲ・サ・ネ（東・西・中央・南・北)」の呼び名の五音のうち一音、二音目は（暦を編み養う・天に宮生じ養う）「ア・ミ・ヤ・シ・ナ・ウ」の六音のうち一音、最後の三音目は「エト（兄弟)」の呼び名の「エ・ト」の二音のうち一音、これを順次汲み合せ、キアエ・キアト、ツミエ・ツマト・ヲヤエ・・・・と続いていき、つまり「５×６×２＝60」の、60 にて一巡する独自のコヨミである。

実際に、『ホツマツタエ』第 22 アヤでは、「キツオサネ（東西央南北）　ヰクラのカミノ（五臓の神の）　ナリイデテ（生り出でて)」の叙述の少し後の、行数番号 24264～24266 では、「エトモリト（エト守りと）　アミヤシナウテ（編み養うて）　ヤミコナル（八御子なる）　アメフタカミノ（イサナギ・イサナミの天二神の）　ミコトノリ（御言宣)」と、そもそものコヨミの成り立ちを 5・7 調で詠っている。

尚、「キアエのコヨミ」の 60 進法は、わが国で長く使われてきたが、古墳時代の漢字渡来の後は、大陸からの十干十二支の 60 進法に漢字国字化でのみ込まれ、7 世紀の壬申の乱の前後では、大陸からの儀鳳暦などにおける十干十二支のスタイルの 60 進法に収斂していったものと推定できる。

参考に、第 22 アヤ後半の、『記紀原書ヲシテ　増補版　上巻』（2021）の行数番号 24359～24365 では、「悠紀と主基の宮」での祭祀の朗詠により、このような願いが込められていることが了解できる。（原文はヲシテ文字である。5・7 調の文章）

「ヨツギタカラト　スサマシク　シヅムチカヒノ　イサオシオ　ユキスキハニノ　ヲヲンカミ　キコシメサルル　キヨハラヒ　ヒミツオカミニ　ツツシミテ　キヨメタマへト　マウシテモフス」。

大意は、（世継ぎ宝とすさまじく　鎮む誓いのイサオシ（功し）を　悠紀主基ハニ（埴土）のヲヲンカミ　聞こし召さるる清はらい　ヒミツ（火水土）をカミに謹しみて　清めたまえと申して申す）。

ここでは古神道の言葉の、「清めたまえ」という「お祓い」のヤマトコトバが出てくる。

そして、次の第 23 アヤの注目点の、行数番号 24407～24426 の叙述について、（　　）内に大意・要約を述べながら進んでいく。（原文はヲシテ文字である。5・7 調の文章）

「ニギハエバ　ヰヤマトトフル　ヤマトクニ　マトノヲシエハ　ノボルヒノ　モトナルユエニ　ヒノモトヤ　シカレドヤマト　ナステソヨ　ワレワトノチニ　ヲサムユエ　オミモトミナリ　ソノユエハ　モトモトアケノ　ミヲヤカミ　ヰマスウラニハ　キタノホシ　イマコノウエハ　ミソムメノ　トノカミヰマス　ソノウラガ　ナカハシラタツ　クニノミチ　アメヨリメグム　トノカミノ　ムネニコタエテ　マモルユエ　ヒトノナカゴニ　アイモトメ　ヒトツニイタス　トノヲシエ　ナガクヲサマル　タカラナリ　アメノヒツギオ　ウクルヒノ　ミツノタカラノ　ソノヒトツ　アメナルフミノ　ミチノクゾコレ」

大意は、（国民が賑わえば　ヤマト国の教えは　昇る日の　本なるゆえに　日の本の　ヤマトの国となる。　われ（アマキミ）は　トの教えの道で治めていく　ミヲヤカミが座される大宇宙には　「ト」のカミたちが守っていて　　ナカハシラ（中柱）立つ国の（繁栄の）道をともに歩んでいこう。　「ト」の教えは　長く治まる宝であり　アメ（天）の日嗣も　ミツノの宝のひとつであり　アメナルフミ（トの教えのフミ）の奥儀は深い）となろうか。後の時代、ハタレが出現した以降には、平定するホコ（剣）が、クニを治めるために必要となってくる。

続いて、行数番号 24529～24542 のセンテンスを考察していく。（原文はヲシテ文字である）

「タミノヰヤスク　ナガラエト　ヒニイノルハヅ　ニシコリハ　ユキスキミヤノ　オオナメノ　ヱノトキノハヅ　アヤオリハ　ハニノヤシロノ　サナメヱニ　スキイノルハヅ　コノユエハ　アヤニシコリハ　オサバヤヲ　ヒトハニヨタリ　ミチフヲリ　コレアシハラノ　トヨノカズ　タナハタカミト　タハタカミ　オナジマツリノ　アヤニシキ　ミチリノタテニ　ヘカザリオ　カケテヨツムツ　フミワクル」

大意は、（人々の平安と国の繁栄が永らえるように　アマキミが祈る　ユキスキミヤ（悠紀・主基の宮）でのオオナメ（大嘗祭）やサナメヱ（夏の初めの祭り）は大切な伝統であり　（例えれば、織物の）立派なニシコリ（錦織）やアヤオリ（綾織）をつむぐように根本的で重要なことである。タナハタカミ（棚機織りカミ・ヒトの生まれ変わりをつかさどる）やタハタカミ（田畑カミ・食糧生産をつかさどる）を祀り　人々とともに高貴な国を造りあげていこう）。

実際に、大嘗会、夏の初めの祭りは、皇室のアマカミにより、はるかな縄文時代から、国の

礎となってきた。日本国民の精神的基盤であり、根本的に尊い国のカタチでもある。

続いて、次の行数番号 24682～24701 の叙述を読んで行こう。（原文はヲシテ文字である）

「ミコトノリ　カガミハタミノ　ココロイル　イレモノナレバ　ヤタカガミ　ツルギハアダオ　チカヅケズ　マタトウカキノ　ヤエイカン　キミニコヱミテ　ノタマフハ　ウシクモコエリ　ソレヤエハ　ムカシフタカミ　クニシラス　モノイフミチノ　アワウタノ　アハアメトチチ　ワハハハヅ　ヤハワガミナリ　コノアワヤ　ノドヨリヒビク　ハニノコエ　クニオシラスル　タネナレバ　アワハアワクニ　ヤハヤモノ　アオヒトクサノ　ナモヤタミ　ヤハイエヰナリ　タハヲサム　ミハワガミナリ　アワクニノ　ヤニイテヤシマ　シラスレバ　ヤハヤツナラズ　モモチヨロ　カサヌルフシノ　ヤエガキゾ」

大意は、（アマキミのミコトノリ（御言宣）　カガミ（鏡）は国民の心を入れる　入れ物であるからヤタカガミ（八咫鏡）と云う。　では、ヤエ（八重）の意味はなんだろうか　昔（イサナギとイサナミの）お二人が　国を治める際に　アワウタ（天地歌）を用いられた。　「あ」はアメ（天）と父　「わ」は母であり　「や」はわが身のことであった。　この「あ、わ、や」がのどより響く　ハニ（地）の声であり　国を治らする種である。　「や」はヤモ（八方）やイエヰ（家居）であり　「た」はヲサム（教え導く）　「み」はわが身である。　しかも「や」は八つならず　モモチヨロ（百千万）もの　重ねる節のヤエガキ（八重垣）という深い意味をもつのである）。　（池田・辻、2021a、590 - 626）

４、第 27（ミヲヤ（御祖）カミ　フナタマ（船魂）のアヤ）

次に、27 アヤの注目点を『記紀原書ヲシテ　増補版　上巻』の行数番号 25780～25789 の叙述について、（　　）内に大意をのべながら進んでいく。（原文はヲシテ文字である）

アマキミのキサキのトヨタマヒメが亡くなられて、「ミコトニマカセ　オモムロオ　イササワケミヤ　ケヰノカミ　ユエハヲキナニ　ケヰオヱテ　メグリヒラケル　チオヱタリ　カドデノケヰゾ　カシハデハ　ヒメワオモムロ　ミヅハミヤ　ムカシナギサニ　チカイシテ　ミソロノタツノ　ミタマヱテ　ナモアヰソロノ　カミトナル　タミツオマモリ　フネオウム　キフネノカミワ　フナタマカ」

大意は、（ミコト（遺言）に任せたオモムロ（御遺がい）は　イササワケミヤに納め　ケヰ（気比）のカミ。ゆえは翁に　門出のケヰ（笥飯）を得て　カシワデ（膳）は（トヨタマ）姫のミヅハ宮　昔渚に誓いして　タツの御魂得て　カミとなる。 田水を護り　船を生む　キフネ（貴船）のカミはフナタマ（船魂）か）。

貴船神社（京都市貴船町をはじめ、全国に多く祀られている）は、古来より、祈雨・止雨の大きな力をもったカミであった。全国にその熱い信仰の痕跡が遺っている。

さて、続いて、行数番号 25814～25825 のセンテンスを考察していく。（原文はヲシテ文字）

「キアトナツ　ミクライナリテ　イセニツグ　アマテルカミノ　ミコトノリ　トカクシオシテ　ワガミマゴ　タガノフルミヤ　ツクリカエ　ミヤコウツセバ　アニツギテ　ワノフタカミゾ　ワレムカシ　アメノミチウル　カグノフミ　ミヲヤモアミオ　サヅクナモ　ミヲヤアマキミ　コノココロ　ヨロノマツリオ　キクトキハ　カミモクダリテ　ウヤマエバ　カミノミヲヤゾ」

大意は、（キアト夏　アマテルキミのミコトノリ（御言宣）　わがミマゴ（孫のウガヤフキアハセス）よ　多賀の古宮造り替え　都を遷せばア（天）に次ぎて　ワ（地）のフタカミの功で

昔アメノミチを得ることができたのは　カグノフミであり　あなた(孫のウガヤフキアハセス)に授く名も　ミヲヤアマキミ（御祖アマキミ)）。

参考に、『ヲシテ文献』では、第 12 代アマキミのウガヤフキアハセスの四男タケヒト様が、従来の国史の初代の神武天皇であった。池田満が指摘するように、『ヲシテ文献』によれば、その前史として初代クニトコタチ　→　クニサツチ　→　トヨクンヌ　→　ウヒチニ・スヒチニ　→　オオトノチ・オオトマヘ　→　オモタル・カシコネ　→　イサナギ・イサナミ　→　アマテル　→　オシホミミ　→　ニニキネとホノアカリ　→　ホオテミとニギハヤヒ　→　ウカヤフキアハセス　→　タケヒト（神武天皇）へと至る、建国の過程が 5・7 調で朗詠されている。

尚、ウカヤフキアハセスの御代については、『先代旧事本紀』巻第六の「皇孫本紀」にも、モノノベ氏の立場から、当時の時代を叙述していることが知られている。

そして、次の行数番号 25842～25850 の叙述の考察に進む。(原文はヲシテ文字である)

「フユイタルヒニ　ヲヲマツリ　アマカミトヨヨ　スヘラカミ　ユキスキノミヤ　ヤマウミト　トミコトタマハ　ハニスキノ　ナメエニツゲテ　ヒトクサノ　ホギイノルナリ　フタカミハ　ツネニタダスノ　トノニイテ　アマネクヲサム　タミユタカ」

大意は、(冬いたる日（冬至）に大祭り　アマカミとスヘラカミ（皇神）　ユキスキノミヤ（悠起・主基の宮）に祀り山や海のカミと　トミ（臣）のコトタマさんは　ハニスキノ（地主基の）ナメエ（嘗会）に告げて人草（国民）の　祝ぎ祈るなり　フタカミ（カモヒトとタマヨリ姫）は　常に正すの殿（下賀茂神社）にいて　あまねく治む　民豊か）となろうか。

具体的に、この伝統的な「ユキスキノミヤ　ナメエ（大嘗會)」の宮中祭祀をよりご理解いただくために、江戸時代の「貞亨四年の大嘗會圖」を掲載しておく。(図 1)

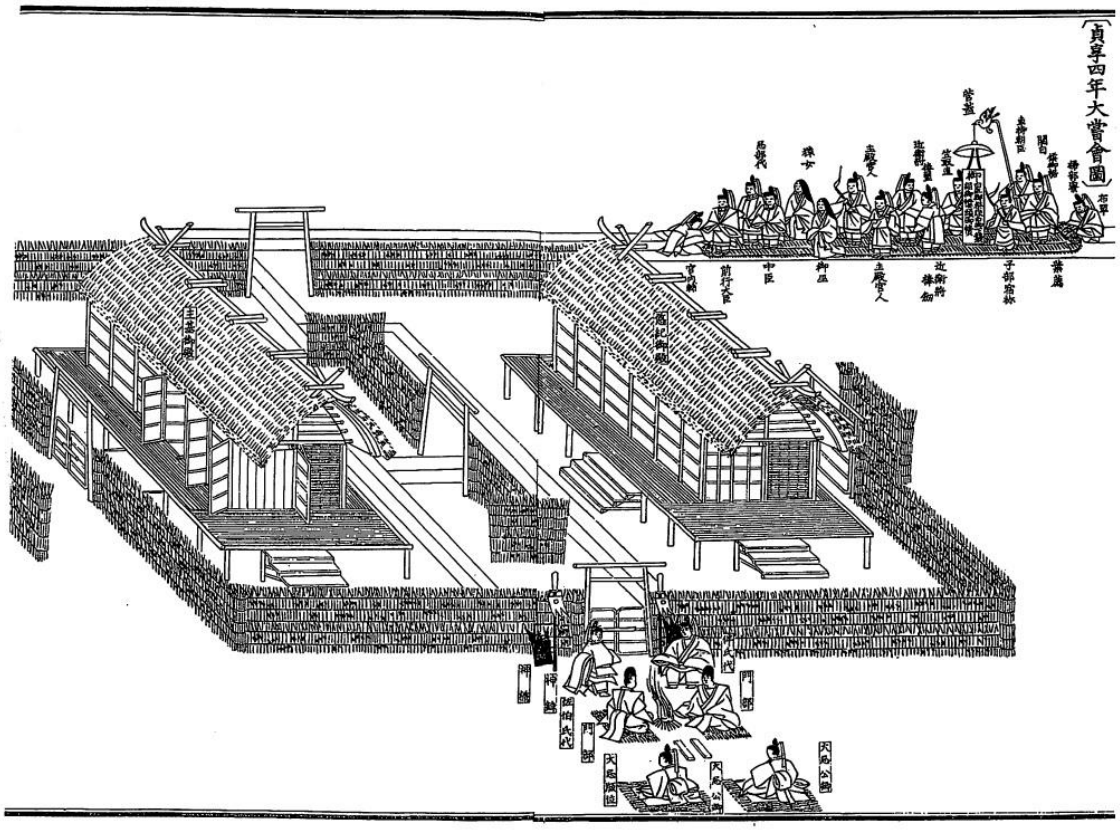

図１『古事類苑 神祇部一』所収「貞亨四年の大嘗會圖」（神宮司廳 1914: 1240-1241）

明治 41 年に制定の皇室祭祀令は、皇室の祭祀を大祭と小祭とに分け、大祭はアマキミ（天皇）みずから祭典を行い、小祭は掌典長が祭典を行って、天皇が親しく拝礼するものとしている。大祭のうちの「神嘗祭」は、当然に、養老神祇令にも載る古い祭典である。

「新嘗祭」は、神代よりアマキミ（天皇）が、大宇宙の諸カミを招請して新穀を共食し、収穫を感謝する祭典であり、宮中での最古の祭祀である。明治 6 年の改暦に際し、同年 11 月下の卯日に当たる、11 月 23 日をもって祭日と定めた。

そして、アマキミ（天皇）即位の初めに行う新嘗が、縄文時代にさかのぼる第一級史料の、『ヲシテ文献（ホツマツタヱ他）』が随所でふれるところの、悠紀殿・主基殿での共饌の儀を含む「大嘗祭」である。

従来から、大嘗祭などの祭儀は、はるかに遠い時代に源流をもち、当然に、天武・持統両天皇の御代以前と考えられてきた。「わが国の固有性のある祭祀が、突如として、新しく成立するといふことは考へられない」からであった。　（西山、1989、37‐66）

そしてさらに、その叙述は、『記紀原書ヲシテ　増補版　上巻』の、行数番号 26014～26032 へと続く。「大嘗祭」の話から、今度は「ミクサタカラ」の話へと叙述は展開していく。（原文はヲシテ文字である。5・7 調の文章）

「アマキミワ　ツクシニミユキ　ムロツヨリ　オカメニメシテ　ウドノハマ　カゴシマミヤニ。ミソフカミ　ミカウオコエバ　メグリミテ　スタルオナオシ　タエオタシ　ミナヲサマルモ　イカヅチノ　カミノイサオシ　ノコリアリ　トトセニタミモ　ニギワヒテ。ヨロトシウタフ　ミヤサキノ　キミノミココロ　ヤスマレバ　ヨワヒモオヒテ　ハヤキジノ　タガニツクレバ　オドロキテ　ミコタケヒトト　モリタネコ　タガヨリイデテ　ニシノミヤ　オオワニノリテ　ウドノハマ　ミヤサキミヤニ　イタリマス　ミヲヤアマキミ　ミコトノリ　タケヒトタネコ　シカトキケ」

大意は、（アマキミ（カモヒト、すなわちウカヤフキアハセス）はツクシ（九州）に御幸、ムロツより船でウトノ（鵜殿）の浜に着き　カコシマミヤ（鹿児島宮）に入る　三十二（県の）守が　御幸を乞えば　めぐり見て廃るを直し　絶えを足し　皆治まるもイカヅチノカミ（ニニキネ）の功績遺りあり。十年で民も治まりにぎわいて　ヨロトシうたう。　ミヤサキのキミ（ウカヤフキアハセス）のみ心やすまれば　ヨワイ（歳）も老いて　ハヤキジ（急使）のタガに告ぐればおどろきて　皇子タケヒトとモリヤクのタネコが　タガより出でてニシノミヤから　オオワニ（大船）に乗って　ウト（鵜戸）の浜に着き　宮崎宮に至り　ミヲヤアマキミ（ウカヤフキアハセス）が御言宣　タケヒト（後の神武天皇）タネコ（天種子）よ　しかと聞け）。

そしてミコトノリは、このように発せられた。次の、行数番号 26032～26055 を読んでいこう。（原文はヲシテ文字である。5・7 調の文章）

「ワレツラツラト　オモミレバ　ヒトグサノミケ　シゲルユエ　ウマレサカシク　ナガラエモ　チヨワモモヨト　ナリカレテ　ワガヤソヨロモ　モモトセモ　ヨノタノシミハ　アヒオナジ　アマテルカミモ　カエラセバ　アメノミチモル　ヒトモナシ　モロトモホムル　カミモナシ　ナンジフタリモ　ナガラエズ　イツセハコナシ　タケヒトハ　ヨノミヲヤナリ　タネコラモ　エトムソウチニ　ツマイレテ　ヨツギヲナセヨ　タケヒトハ　トシソヰナレバ　ワガカワリ　タネコガタスケ　ヲサムベシ　シラヤノヲシテ　タケヒトニ　クニオシラスル　モモノフミ　タネコニユヅル　ワガココロ　サキニカガミハ　オシクモニ　マタヤヱガキハ　ワニヒコニ　サヅクオヒメガ　アヅカリテ　ワケツチミヤニ　オサメオク」

大意は、（つらつら考えるに、国民の食糧もシゲルユエ（繁り）　ナガラエ（寿命）も短命と

なり枯れて　世の楽しみは相同じ　アマテルカミも長寿で天に還らせば　アメノミチを護る人もなし　諸ともほむるカミもなし。　タケヒトは世のミオヤ（御祖）なり　タネコらもヱトのムソ（一めぐりの 60 年）内に　妻を入れて世継ぎをなせよ　タケヒトは歳まだソヰ（15）歳なれば　わが代わり（皇太子としてマツリをとる）として　タネコが助け治むべし　白矢のヲシテ（璽）をタケヒトに譲り　国を治らする百のフミ（典）をタネコに譲る。　わが心であるところの先に渡したカガミ（鏡）はオシクモに　また八重垣（ツルギ・剣）はワニヒコに授くを　キサキのタマヨリ姫が預かりて　ワケツチミヤ（現在の京都の下鴨神社（賀茂御祖神社））に納め置く）。

そして叙述は、次の行数番号 26055～26070 へと続く、（原文はヲシテ文字である）

「ホツマナルトキ　オノヅカラ　ミクサノタカラ　アツマリテ　ミヲヤトナスガ　ホツマゾト　ミヤザキヤマノ　ホラニイリ　アカンタヒラト　アガリマス　ミコモオツトメ　ヨソヤスム　ミソフアツマリ　アグルナハ　ツクシスヘラキ　コノヨシオ　タガニツグレバ　モニイリテ　ヒウガノカミト　マツリナス　ヲニフニマツル　カモノカミ　アヒラツヤマハ　ミヲヤカミ　ノチニタマヨリ　カミトナル　カアヒニアワセ　ミヲヤカミ　メトノカミトテ　イチシルキカナ」

大意は、（国民が歓喜して集うホツマ国となる時、おのずからミクサ（三種）の宝が集まりてタケヒトをミヲヤ（正式にアマキミ）となすがホツマぞと　ミヤザキ山のホラに入り　カミ上がりなされた。　皇子タケヒトは　ヨソヤ（48）日の喪を済ませた。　ミソフ（32）のカミが集まり　タケヒトにツクシ（九州）スヘラキの名をささげ　この由を多賀に告ぐれば　カミあがりされたウカヤフキアハセスのオオキミをヒウガのカミと祀りなす　ヲニフ（遠敷・福井県小浜市の遠敷村に若狭彦神社がある）に祀る賀茂のカミ　のちにタマヨリ（姫）がカミとなるカアヒ（京都市左京区の河合神社か？）に合わせ祀りミヲヤカミ　メフノカミ（婦夫のカミ）とて著じるしきかな）。　（池田・辻、2021a、764 - 800）

５、第 28（キミトミ　ノコシノリ（遺し法）のアヤ）、マサカキからアスス暦へ

次に、28 アヤでの注目点を、『記紀原書ヲシテ　増補版　上巻』の行数番号 26083～26094 について、（　　）内に大意を述べながら進んでいく。（原文はヲシテ文字である）

「ウエツギノ　ヰモニイタレバ　ミヲハカリ　ヨロトシミチテ　ヰヲツギノ　アメノマサカキ　トシノホノ　トトセニハヰサ　ムソトシニ　ミタノブヱトノ　ヒトメグリ　アクルトシナル　ミタノアヱ　ナレバフタヱト　キアヱヨリ　ヱトホトカゾエ　ヒトヱムソ　トヱハムヲトセ　モヱハムチ　チヱニムヨロオ　アマモリノ　ヒトメグリヅツ　コヨミナル」

大意は、（（初代クニトコタチからウガヤフキアハセスの代まで）植え継いだ 500 回に至る年数を数えるマサカキ（真榊）は、10 年でヰサ（5 寸）、ムソトシ（60 年）にミタ（三咫）伸びるヱトの一めぐり。ミタ（三咫）のアヱ（天枝）が成れば　2 ヱト目のキアヱより、ヱ（枝）とホ（穂）と数えて、ヒトヱ（1 枝）がムソ（60 年）で、ソヱ（10 枝）はムモトセ（600 年）を示す。　モヱ（100 枝）はムチ（6000 年）、チヱ（1000 枝）にムヨロ（6 万年）をアマモリ（天守）の、ひと巡りごとのキアヱのコヨミ（60 進法）を刻みながらコヨミ（暦）がなっていく）。

絶対年数の正確性が劣っても、栗など堅果類が基盤の時代のコヨミだったことが理解できる。

続いて、行数番号 26100～26115 の叙述を読んで行く。（原文はヲシテ文字である）

「ヰヨタマキネノ　イサコヒメ　ナナヨノカミノ　タカヒトト　タカヒノツサノ　ツクバヤマ　イサカワハナル　ミヤニヰテ　ウナヅキアミテ　ギミアイテ　ナモイサナギト　イサナミノ　アメフタカミノ　ミコナキヲ　カレタマギネノ　カツラキノ　ヤマニイノレバ　アメミヲヤ　ヒノワノミタマ　ワケクダシ　アマテルカミオ　ウミタマフ　トキフソヒスス　モフソヰヱ　ミソヒキシヱノ　ハツヒノデ　ワカヒトトモニ　アレマセバ　イミナワカヒト　ウブミヤハ　ハラミサカオリ」

大意は、（ヰヨ（5 代）タマキネ（トヨケ（豊受））の娘の　イサコと　ナナヨ（7 代）のタカヒト（アメカカミカミの曾孫のイサナギのこと）と　タカヒ（ヒタカミ国の略）のツサ（西南）のツクバヤマ（筑波山）、イサ川離る宮にいて　うなづきアミ（相見）て　名もイサナギとイサナミの　アメ（天）ふたカミの　ミコ（皇子・嗣子）無きを　タマキネのカツラギの　山に祈ればアメミヲヤ　日の輪の御霊を　分け降し　アマテルキミを生みたまう。　時フソヒスス（21 鈴）モフソヰヱ（125 枝）　ミソヒ（31）キシヱの初日の出　若日とともに生まれませば　いみなワカヒト（のちのアマテルカミ）　ウブミヤ（産宮）は　ハラミのサカオリである）。

ここでのハラミのサカオリ宮は、アマテルキミ（天照大神）のご誕生の地であることを叙述していることが了解できる。

尚、朗詠の中のアマツキミのタカヒトさまについては、現代まで続いている代々の「天皇」（日嗣の皇子）のお名前に、ヤマトコトバ（ヲシテ文字）で「ヒト（仁）」とお付けになったはじまりでもある。

参考に、そのいわれは大切なことで、『ホツマツタヱ』第４アヤの、行数番号 20633～20637 に、「ヰミナニハ　タラニヨツギニ　ナトノリト　アワセテヨツナリ　アマツキミ　ヒヨリトマデヲ　ツクスユヱ　ヒトニノリマス　キネトヒコ　ウシモノリナリ」とある（原文はヲシテ文字である）。

つまり、（イミナ（実名）には　タラ（父母）に世継ぎに　名と乗りと合せてヨ（4）つなり。アマツキミ（天皇）は　ヒ（1）よりト（10）まで　全力を尽くすゆえに　ヒト（仁）に乗ります。キネ（杵）とヒコ（彦）ウシ（大人）も乗りなり）と、「ヒト（仁）が、アマツキミ（天皇）のお名前につくのだ」、と深い意味を私たちに説明してくれている。　（池田・辻、2021a、102）

さて、続いて、28 アヤでの注目すべきセンテンスの、行数番号 26158～26173 を考察していく。（原文はヲシテ文字である。5・7 調の文章）

「ミコオシヒトモ　ミソヨロハ　ヲサメテミコノ　ホノアカリ　トクサタカラニ　カケメグリ　ソラミツヤマト　アスカミヤ　オトキヨヒトハ　ニハリミヤ　アラタヒラキテ　タミヲサム　ソヤヨロトシニ　コトオエテ　ミヅキワワカル　ニハリブリ　アメヨリミツノ　カンタカラ　キミトミワケテ　タマワレバ　ココロヒトツニ　クニノナモ　シワカミホツマ　アラワル　ミソヨロフレバ　アメノナモ　ワケイカツチノ　アマキミト　ムソヨロヲサム　ヲヲンメグミヅ」

大意は、（皇子オシヒト（9 代アマカミのオシホミミのイミナ）も　ミソヨロ（30 万、100 年）治めて　皇子の兄のホノアカリは　トクサタカラ（十種宝）に駆け巡り　空見つヤマトアスカミヤ（飛鳥宮）。弟のキヨヒト（ニニキネ）はニハリミヤ　新田拓きて民治む。ソヤヨロトシ（18 万年）に事終えて　水際わかるニハリフリ（新治振り）　アメ（天）より三つの神宝　キミ臣分けて賜れば　心ひとつに国の名も　シワカミ　ホツマ顕わるる　ミソヨロ（30 万）経れば天の名も　ワケイカヅチ（別雷）のアマキミとムソヨロ（60 万）治めるヲヲンメグミ（大御

恵み）ぞ）となろうか。

さらに 28 アヤにおける行数番号 26204～26231 の、大事な叙述を読んでいく。（原文はヲシテ文字である。5・7 調の文章）

「ウエズシテ　ハエルモアメヨ　ワガイノチ　アメガシラスト　ヤヲカミオ　メシテワガヨオ　イナマント　サルタニアナオ　ホラシムル　マナヰニチギル　アサヒミヤ　オナジトコロト　ノタマエバ　モロオドロキテ　トドムレバ　イヤトヨワレハ　タミノタメ　ニガキオハミテ　ヲナソミヨ　フチヰヲトシオ　ナガラエテ　アメノタノシミ　オボユレバ　ヨニノコスウタ　ツネニキク　サヲシカヤタノ　ワガカムリ　ハトミモタミニ　ヲオトドケ　アワオツカネテ　ヒツギナス　モスソオクメド　キミタミノ　ヲシエノコシテ　アニカエル　トテナイタメソ　ワガミタマ　ヒトハアノモノ　ウエニアル　ワレハカンムリ　ヒトグサハ　ミミチカキヲゾ　ムネキヨク　ミハアカツケド　サシガミテ　アメニツグレバ　サヲシカノ　ヤツノキコエニ　アラワレテ　イノレモガモト　ミモスソノ　タミオナデツツ　サヲシカノ　キヨキニカミハ　アリトコタエキ」

大意は、（植えずして生えるもアメ（天）よ　わが命　アメが知らすと八百カミを　召してわが世を辞まんと　サルタに穴を掘らしむる　マナヰ（京都府京丹後市峰山町の比沼真名井神社）に契るアサヒ宮　（祖父のトヨケと）同じ所とのたまえば　諸おどろきて止むれば　否とよわれは　民のため　苦きを食みてヲナソミヨ（173 万）フチヰヲトシ（2500 年）を長らえて　アメ（天）の楽しみ覚ゆれば　世に遺す歌。常に聞く　サヲシカヤタ（早牡鹿・八咫）のわが冠ハトミモタミ（左右の臣や多くの民）に緒をとどけ　アワ（天地）を束ねて日嗣なす　モスソ（裳裾）を組めど（崩御のこと）　君民の　教え遺してア（天）に還る　わが御魂　人はア（天）のもの　上に在る　われは冠　ヒトグサ（国民）はミミ（身体）近き緒ぞ　ムネ（宗・本来のこころ）清く　身は垢つけど　サシ（早鹿）が身て　アメ（天）に告ぐればサヲシカの　八つ（ト・ホ・カ・ミ・ヱ・ヒ・タ・メの祝詞にも関係する）の聞こえに顕れて　祈れもがもとミモスソ（御裳裾）の　タミをなでつつサヲシカの　清きにカミは在りと答えき）。

続いて、28 アヤの注目すべき行数番号 26242～26279 の叙述を読んで行く（原文はヲシテ文字である。5・7 調の文章）

「マタキサキ　ヒロタニユキテ　ワカヒメト　トモニニココロ　マモルベシ　ワレハトヨケト　ヲセオモル　イセノミチナリ　マタコヤネ　ナンジヨクシル　タケコガコ　クシヒコウマレ　スグナレバ　サヅクミホコニ　カンガミテ　ミモロニイリテ　トキマツモ　ミチオトロワバ　マタイデテ　ヲコサンタメヤ　ナンジマタ　カガミノトミハ　カロカラズ　カミオミヤコニ　トドムベシ　ワレモマモラン　コレナリト　ミヨノミホバコ　ミヲシテト　ナンジカスガヨ　ノコシモノ　タガニモチユキ　ササゲヨト　ミヅカラコレオ　サズケマス　カスガハキミニ　タテマツル　カミノヲシテト　サヲシカノ　カムリトハモハ　ココチリゾ　ミユキノミコシ　マナヰニテ　アマテルカミハ　ウチツミヤ　トヨケハトミヤ　カレカスガ　オクリテノチハ　ツトメオリ　ミカサヤシロノ　タマカエシ　クニヲサマレバ　カレモナシ　マツリノアヤオ　ミツソメテ　ヒトツモチユキ　ヒヨミナス　フタエニサヅケ　ミモスソノ　サコクシロウヂ　アラタメテ　アマテルカミノ　ウチツミヤ　ヤヲツガフカミ　ハンベリテ　ヒモロゲササゲ　アニコタフ　イセノミチウク　カントミノ　ツガウカミラガ　ハベルユエ　ウチハベドコロ　カスガカミ　フトノトコトオ　ツカサドルカナ」

大きく意訳すれば、（またキサキ　ヒロタ（広田神社）に行きてワカヒメと　共に「ニのココロ」守るべし　われはトヨケ（豊受）とヲセ（男背）を守る　イセ（伊勢）の道なり　またコ

ヤネ　汝よく知るタケコの（大己貴との間の）子　クシヒコ（第２代オオモノヌシ）生まれすぐなれば　授くミホコ（御矛）に鑑みて　ミモロ（三輪山）に入りて時待つも　道衰ろわば　また出でてオコ（興）さんためや　汝またカガミ（鏡）のトミ（臣）は軽からず　カミを都に留むべし　われも守らん　これなりと　ミヨ（御代）のミホバコ（御衣箱）ミヲシテ（御璽）となんじカスガ（春日・アマノコヤネ）よ　ノコシモノ（遺しもの）　タガに持ち行き捧げよと自らこれを授けます。

カスガはキミ（君）に奉る　カミのヲシテ（璽）とサヲシカの　冠とハモ（衣裳）は　ココチリ（菊のご紋章）ぞ　御幸のミコシ（神輿）　マナヰ（京丹後市の比沼真名井の地）でアマテルカミは内つ宮　トヨケ（タマキネ）はトミヤ（外宮）　カスガは送りて後はつとめ降り　ミカサヤシロのタマカエシ（魂返し）　国治まれば枯れも無し　祀りのアヤを三つ染めて　一つ持ち行き　日読みなす　フタエ（アメフタエ・オシクモ）に授け　ミモスソ（御裳裾）の　ウジ（三重県の宇治山田のアマテルカミの伊勢神宮）の内宮。ヤモ（八百）つがうカミらが　はんべりて　ひもろげ捧げア（天）にコタウ（応う）。伊勢の道受くカントミ（カミ臣）の　つがうカミらがはべるゆえ　ウチハベドコロ（内侍所）カスガ（春日）カミ（アマノコヤネ・その子孫）　フトノトコト（太宣言）をつかさどるかな）。

【フトノトコト（太宣言）　→　太祝詞（ふとのりと）のはじまり】

参考に、『ヲシテ文献』よりもずっと後の時代になって、主要な祝詞は、『延喜式』巻八に、祈年（としごい）祭から出雲国造神壽詞（かんよごと）までの二十七編が収められている。

ただし、國學院大學の金子善光たちが指摘するように、「『延喜式』の祝詞が果たして元のままであるのか、第二に、祝詞という呼称そのものに検討の余地はないのか」などの課題が存在している。（金子、2012、269 - 281）　なぜなら、ノト（祝詞）が、『ヲシテ文献』時代の躍動する豊かな祭祀の内実から、音韻のみを借りる万葉仮名や、奏上体・宣読体式の公式記録へと移った際の、微妙な内実の変質の可能性の側面にも目を向ける必要があるからである。

続いて、次の注目すべき行数番号 26316～26334 の叙述を考察していく。（原文ヲシテ文字）

「アルジトフ　サクスズハタチ　ノビイカン　カレニウセタリ　コレモアメ　トキニフタエガ　コヨミナハ　イカガナサンヤ　トキニヒメ　タラチヲカミニ　カリイワバ　ススキハヨワヒ　ハタトセノ　ノビモコノキノ　アノイノチ　カスガモヨワイ　ナガケレバ　コレナヅクベシ　トキカスガ　ヤヤエミイワク　コヨミナオ　アスズトセンヤ　トキニヒメ　モロカミトモニ　ムベナリト　アススニキワメ　フソヒホノ　キナエノハルハ　アメフタエ　アスズコヨミト　ナオカエテ　アヅサニホリテ　タテマツル　アススコヨミオ　モロウケテ　コノヨノワザオ　カンガミル　コヨミコレナリ」

大意は、（アルジ（主）問う　サクスズハタチ（20 歳）伸び如何。カレニ（枯れに）失せたり　これもアメ（天命）　時にフタエ（アメフタエ・オシクモ）が「暦名は如何なさんや」　時にタナコヒメ（八代アマテルキミと北の妃ハヤコとの娘で、アマテルの弟ツキヨミの子イフキヌシの妻）が　父親カミの口調に借り言わば　「ヨワイ（齢）長ければ　これ名付くべし」　時にカスガ（アマノコヤネ）ややエ（笑）み　曰く　「暦名を　アススとせんや」。

時にタナコヒメも諸カミ共に「むべなり（もっともなことだ）」と　アスズにキワメ（決定）フソヒホ（21 穂）の　キナエの春は（紀元前 697 年で神武天皇即位の 37 年前）　アメフタエが「アスズコヨミ」と　名を改えてアヅサ（梓の木？）に彫りて奉る。このアスズコヨミを諸受けて　この世の業を鑑みる　コヨミ（暦）これなり）。

参考に、『日本書紀』巻第三で神武東征の時「是年、太歳甲寅（干支の 51 番目）」と紀年が

はじまるが、『ホツマツタヱ』の朗詠ではアスス 51 年キミヱ（キアヱのコヨミの 51 番目）の紀元前 667 年で、タケヒト（後の神武天皇）即位の 7 年前であり、両書とも年数が一致している。

池田満の『ホツマ辞典　改訂版』が解説するように、アスス暦より以前は、マサカキ暦が用いられていた。長寿の樹木のマサカキ（別名ススキという）を、長い年数を数える単位として用いる暦で、マサカキ 1 本が 6 万年に相当するとされる。50 本目のマサカキの苗が 20 年目にして枯れてしまう。苗を全国かけて探したが、見つからず、このためアズサ（梓？）に彫り付けて年数を数えるアスス暦に切り替えられた。そこでタケヒト（神武）15 歳の年を、アスス 21 年としてはじまった経緯である。（池田、2020a、34 - 35）

さらに、池田満はこう補足する。「『ホツマツタヱ』の最終編集のなされた、アスス 843 年には、『ミカサフミ』『カクのミハタ』も同じく上梓されました。時のスヘラギ（古代の天皇陛下）のヲシロワケさん（景行天皇）は、「ミクサのミチの　そなわりて」とおっしゃいましてお喜びになられました。すなわち、ミクサタカラの、このそれぞれの担うミチ（精神）が明らかになったということです」。　（池田、2020b、9）

続いて、28 アヤの行数番号 26470～26483 と、中略の後の 26491～26496 の、ナガスネヒコの行動の顛末の流れを読んで行く。（原文はヲシテ文字である）

「サキニカグヤマ　ナガスネハ　ミヲヤスヘラギ　ミコナキオ　オシクモイノル　ソノフミオ　コエドサヅケズ　マカルノチ　アマノタネコハ　コノフミオ　ミカサニコメテ　キミノトモ　ナガスネヒコハ　ソノクラオ　ヒソカニアケテ　ウツシトル　クラトミツケテ　コレオツグ　タネコオドロキ　キミニツグ　サヲシカヤレバ　ミココタエ　クラドガワザハ　ワレシラズ　コレニアラケテ　コトシロハ　イヨニトドマル　（中略）　ナガスネガ　ワレオタツレバ　イチサワグ　カレニハラミノ　ミコフレテ　ホツマヒタカミ　カテフネオ　ノボサヌユエニ　タガノミヤ　ツクシノミヤニ　イキザマス」

この朗詠の箇所は、第 10 代アマカミの、兄の方のホノアカリの左の臣であったフトタマの子孫で、ホノアカリにやはり左の臣として仕えた人物のナガスネが、キミの子欲しさにヨツギフミを写し盗む事件を起こしてしまう経緯を述べている。この事件が引き金となって、やがてタケヒト（神武）のヤマトウチ（東征）の大義の一つとなる。そして、アスカ（飛鳥の宮）の主君ニギハヤヒは、ナガスネヒコの頑なさを断ち切り、タケヒトにまつろうことになる。

このセンテンスの大意は、（先に香久山　ナガスネは　ミヲヤスヘラギ（御祖天皇）御子無きを　オシクモ（アマノコヤネの継子であり、第 12 代アマカミのウガヤフキアハセスに左の臣として仕えた）祈る　そのフミ（書）を　乞えど授けず。その後にアマノタネコは　このフミを　三笠（宮の倉）に籠めて　キミのお供。

ナガスネヒコは　その倉を（留守を幸いに）ひそかに開けて写し盗る　クラト（倉人）見つけて　これを告ぐ。タネコ驚きキミ（タケヒト）に告ぐ　サヲシカ（勅使）やれば　（ナガスネの主人のニギハヤヒの）ミコは答え　倉人がワザ（業）は　われ知らず　これに荒げてコトシロヌシはイヨ（伊予）に留まる。　（中略）　ナガスネが　われを立つれば　イチ（市中）が騒ぐ　ハラミ（富士山麓の宮）の皇子触れて　ホツマ（関東地方）、ヒタカミ（東北地方）、カテフネ（糧船）をノボ（上）らさぬゆえに　タガのミヤ（宮）　ツクシ（九州）のミヤ（宮）に行き座ます）。　（池田・辻、2021a、802 - 854）

この箇所では、十代アマカミのホノアカリとニニキネの時代に起きた、二朝並立の時代に幕引きをするのが、神武天皇の東征の意味合いであったことを朗詠している。このことは『古事

記』『日本書紀』に記されていない重要な記述である。

実際に、先行研究者たちが揃って指摘するように、ナガスネヒコは、東北地方のヒタカミからイカルガに下っていたアマキミのホノアカリのナオコ（養子）で、日嗣のニギハヤヒのキサキの兄であり、軍事をつかさどるアスカ（飛鳥・香久山）朝のトミ（臣）である。「そのトミ（臣）を『古事記』は地名の登美、『日本書紀』も地名と共にトビ（鵄）に因むトミ（鳥見）と（誤訳）し」、『ホツマツタヱ』の朗詠での、アスカ（飛鳥・香久山の宮）と、九州のウカヤフキアハセス及びタケヒト（後の神武天皇））のミヤサキ（宮崎の宮）のキミが並立する時代背景を、記紀が意図的にぼやかしたとみることもできる。　（千葉、2018、208）

６、『カクのミハタ』の「トシウチニ　ナスコトノアヤ」、トはノトウタ（祝詞歌）の初め

格調の高い『カクのミハタ』の大切な箇所を、『記紀原書ヲシテ　増補版　下巻』を底本に考察する。が、その前に、古くからの祝詞のひとつである「ト・ホ・カ・ミ・ヱ・ヒ・タ・メ」は、「ト」を重視するために、敢えて兄弟の弟の「ト」を先に言うことをおさえておこう。

クニトコタチは、「ト」の夏の季節を最重要視した。このため、もともとは「ヱ・ヒ・タ・メ・ト・ホ・カ・ミ」の順番だったものを、トホカミヱヒタメと称えることになった経緯である。ヱが兄で、トが弟なのだが、年間の季節循環の関係と宮廷行事のいわれの説明場面の一部が、次の行数番号 55002～55017 の叙述である。（原文はヲシテ文字である。5・7 調の文章）

「アルヒコフ　ヱオコノカミト　ヲモヒカネ　イチヰタダセバ　タマキネノ　コノナスコトオ　ノタマワク　ヱハコノミツノ　ヒトヲカミ　ヒノミチササゲ　ネニカエス　ヒトヲフセテモ　アメワユキ　トノカミオシテ　ウイナメヱ　シワスレバヤヤ　ツチニミツ　ヨロギネウルヒ　ウヱサムク　スヱニヒタケテ　ソラサムク　カタチハヱミツ　ヲノハシラ　ヱモトノカミノ　ワカルヨハ　イリマメウチテ　オニヤライ　ヒラギヰワシハ　モノノカキ　ホナガユズリハ　シメカザリ」

大意は、（ヱオコノカミとオモイカネが　いわれを聞けば　タマキネ（5 代タカミムスビのトヨケ）が　年間の行事の由縁をのたまう。　「ヱ（兄）」は日の道の　ヒトヲカミ（一陽神）でネ（北）にカエス（還す）。　アメワユキ（天地悠紀）と　「ト（弟）」の神をして　ウイナメヱ（初嘗会）。　シワスレバ（12 月、師走れば）やや（清い寒気が）ツチ（地）に満ち　ヨロギネ（万木根）が（日々に）冷気に満ちていく。　末には日が長くなり　ヲノハシラ（陽の柱）の　「ヱ」モトノカミ（ヱの元の神）の　別れていく季節の夜には　イリマメウチテ（煎り豆を投げて）　邪気や鬼をヤライ（遣らい）　ヒイラギヰワシ（柊の葉や鰯）を備え　シメカザリ（しめ飾り）して良い月日を迎える）。

現代での節分の「豆まき（鬼払い）」などが、縄文時代から行われていた古い慣習であったことはもちろん、ヒイラギやイワシまでがそのままに今日に伝わった風習であったことに、私たちは感動するのである。

それにつながる、行数番号 55032～55047 の叙述を読んでいこう。（原文はヲシテ文字）

「キサラギヤ　コリヱココロミ　ムママツリ　ヨロギヒイツル　カミカタチ　タハキソラテル　ミツヲカミ　キサラギナカニ　ミツヲキテ　アオヒトグサオ　ウルオセバ　イトユフノドカ　ヤヨイキテ　モモサキメヲノ　ヒナマツリ　クサモチサケニ　ヒクイモセ　ヤヨイナカセエ　カゲラウヤ　メツタリオサム　タモトガメ　メハツネニスム　ミヅノカミ　ウヅキハウメ

ノ　ヲオマネク　サナエアオミテ　ナツオツグ　ナカワタヌキテ　ツキスエハ　アオイカツラノ　メヲマツリ　フタバニノボル」

大意は、(キサラギ(如月・2月)や　ムマ(馬)祭り　ヨロギ(万木)日出る　カミの形　「タ」はキソラ（東の空に）照る　ミツヲカミ　キサラギ（如月・2 月）の中に　ミツヲ（三つ陽）来て　アオヒトクサ（人々・青い草がふえることを人々に例えている）をうるおせば　イトユウ（細いかげろうのこと）のどかに　ヤヨイ（弥生・3 月）の月が来て　モモ（桃）が咲きメヲノ（陰陽の）　ヒナマツリ（ひな祭り）がくる。

草餅や酒に引かれるイモセ（妹背・親しい間柄の姉妹や兄妹、夫婦）たち。ヤヨイ（弥生・3 月）の月の半ば以降には　カゲロウ（陽炎）が立ち　メツタリ（陰つ足り）治む。　「タ」の元がメ（陰）　メの（ヲシテ文字は）ツネ（西北）の　住むミツ（水）のカミ。　ウズキ（卯月・4 月）はウメ（太陰）の　ヲ（陽）を招く　サナエ（早苗）青みて　夏を告ぐ。中綿抜きて（4 月中頃には）　アオイカツラ（葵桂）の　メヲマツリ（陰陽祭り・京都の賀茂神社のアオイ祭り）　フタバ（双葉）にのぼる)。

【アオイ祭りは、葵と桂の葉が同一の節に二枚が向かい合せであることから、夫婦の大切な縁、男女の仲むつましさ（伊勢の道）の奥深い意味を表しているとされる。この例祭は毎年 4 月中酉の日（現在は 5 月 15 日）の賀茂祭りで、葵の葉を社前や牛車にかけ、供奉者が衣冠につけたところから、近世以降はアオイ祭の通称で名高い】

また、第 1 アヤの行数番号 20229～20232 に、「アメ（天）の巡りのミムソヰ（365）エ（枝）4 つ（四季）3 つ（4×3 の 12 か月）分けて　ミソヒ（31 日）なり。ツキ（月齢）は遅れてミソ（30 日）足らず」などとあるように、縄文・弥生時代に、わが国独自の太陰太陽暦があったことが、よく理解できる。　（池田、2001。森田、2021d・2021f）

さらに、私たちが確認できるのは、『ヲシテ文献（ホツマツエ他）』のヤマトコトバが甦って以降、キサラギ（如月・2 月）、ヤヨイ（弥生・3 月）、ウヅキ（卯月・4 月）・・・フミツキ（文月・7 月）・・・カンナツキ（神無月・10 月）・・・・シワス（師走・12 月）などの各月の名前は、便宜的に付けられた漢字の当て字は別として、各月の名称自体は、縄文時代から話されていたところの、純粋なヤマトコトバであったことである。

さらに、次の行数番号 55057～55072 のセンテンスを読んでいこう。(原文はヲシテ文字)

「メハイニミテド　ウエアツク　ミナヅキスエハ　イヨカワキ　モモニチマツル　チノワヌケ　ヰソラオハラフ　ミナヅキヤ　カタチハクニノ　ナカハシラ　マテニトトナフ　トモトカミ　ホハキネニスム　フタメカミ　アフツキフメオ　アニヤワシ　アキカゼツゲテ　マヲマユミ　イトオツムギテ　タクハタヤ　アワノホギウタ　カヂニオシ　シムノモチホギ　ヰキメタマ　オクルハスヰヰ　ヱナガノリ　アヲギオドレバ　アヰウクル　ハツキハジメハ　フタメサク　アラシクサフス」

大意は、(ミナヅキ(水無月・6 月)の末は　(大宇宙の)イヨ(御栄えの気)乾き　モモ(桃)にチマツル（チ祭る）茅の輪くぐり（穢れを祓い清める神事）が　イソラ（邪気）をハラウ（祓う）　（トの）形は国の中柱。　マテ（両手）に整う「ト」のカミ　「ホ」は東北に住む　フタメカミ（二陰カミ）　アフツキ（天の文月・7 月）フメ（二陰）を　天に和らぎ　秋風告げて　アワノホギウタ（天地の祝い歌）を詠う。　イキメタマ（今の生きている人々のタマ）を（楽しみいわう）そなえるハスヰヰ（蓮葉の上の飯）は　エナ（生まれ変わりの同朋）としての（当然の）ノリ（規範）であり　仰ぎ踊れば　アイ（天意）を受ける私たちである。　ハツキ（葉月・8 月）の初めは　フタメ（二陰）咲き　アラシクサフス（台風で草が伏し倒されて

しまう))。

続いて、次の行数番号 55083～55096 の叙述を読んでいく。（原文はヲシテ文字である）

「カモトカミ　ミハキサニスム　ソノメフリ　ヲカミシリゾク　ハツシグレ　ヤヤメモミチテ　ナカゴロハ　ヲノカミツキテ　カミナヅキ　ネノツキツユモ　シモバシラ　コガラシフケバ　キバミオチ　ヒラギハツクサ　メハルナリ　カタチカゼモツ　ミモトカミ　カクメヲオモル　ソノナカニ　トハミナミムク　ヒトクサノ　コトホギノブル　コノユエニ　トハノトウタノ　ハジメゾト　ツネナスコトニ　アメオシルナリ」

大意は、（「カ」の元カミ　ミは東南に住む　ヲカミ（あたたかさのはたらき）退く　初時雨ややメモ（陰も）満ちて　中ごろは　ヲのカミ（はたらき）尽きて　カミナヅキ（神無月・10月）　霜柱　木枯らし吹けば　キハミ（黄ばみ）落ち　柊初草　芽張るなり。　「ミ」の元カミ　かくメヲ（陰陽）を守る　その中に　「ト」は南向く　ヒトクサ（国民）の　（寿命・いのちを）言祝ぎ宜ぶる　このゆえに　「ト」はノトウタ（祝詞歌）の　初めとぞ（前述の「ト・ホ・カ・ミ・エ・ヒ・タ・メ」の順の祝詞になったことを指している）　常なすことに　アメ（天）を知るなり）。（池田・辻、2021b、569 - 580）

読んでいて精神の躍動を感じる、格調高い、気品のある 5・7 調の朗詠である。池田満も、この『カクのミハタ』の朗詠の、レベルの高さをこう表現している。

「この文面に見られるように、アマカミという至尊のお立場から発せられた文意から綴られた文章であることが明らかになってきました。教えを聞いて、その有り難さに涙を流すのは、一般の国民であり中間指導者の「トミ（臣）」の立場であります。ところが、国民の幸せを一身に背負われるアマカミは、つねに、良くも悪くも矢面の一番前に立たされます。ですから、お立場が違うのです。自ずと、文章・文面にそのお立場の在り処はにじみ出てまいります。その、微妙な差異のあるところを、われわれは、やっと、気が付く事が出来ました」。

「アワウタのアヤ」にしても、「トシウチニ　ナスコトノアヤ」にしても、より高度なお立場の雰囲気が強く感じられるのである。（池田、2020b、10 - 11）

７、「戦後の知的空間」の劣化の原因を考える

続いて、『ヲシテ文献』のメッセージの視点から、戦後の日米関係の推移に眼を転じよう。

1945 年 8 月、米国により広島と長崎に原子爆弾を落とされ、ポツダム宣言を日本は受諾し、終戦となった。日本を占領した GHQ は、未だ歴史的評価の定まるはずもない、準備していた物語、つまり「太平洋戦争史」と呼称した特別記事を即座に日本の各新聞社に掲載させた。

その後、日本を占領した GHQ の、教育問題担当の民間情報教育局（CIE）は、10 月 22 日付の覚書・SCAPIN－178「日本教育制度ニ対スル管理政策」を発して、日本国の国民教育への内政干渉を開始した。

続いて 10 月 30 日には、SCAPIN－212「教育及ビ教育関係官ノ調査、除外、認可に関スル件」（教職追放指令）を、12 月 15 日には SCAPIN－448「国家神道、神社神道ニ対スル政府ノ保証、支援、保全、監督並ニ弘布ノ廃止ニ関スル件」（神道指令）を出した。

そして 12 月 31 日には、SCAPIN－519「修身、日本歴史及ビ地理停止ニ関スル件」という、日本の歴史を教えることを禁じる指令を発した。歴史的な独自の精神文化の尊重という世界最大の価値を踏みにじり、国際法上にも問題をはらんでいた。

佐伯啓思は、当時の混乱をこのように述べる。「戦争中の日本人は、「大本営発表」という虚

偽の発表に欺かれて、真実を知らされていなかった、というのです。そういう面を否定できません。しかしそれでも、あの戦争が、軍国主義者による世界もしくはアジアの支配を意図した侵略戦争であった、という戦争観は、いくら新たな事実が出てきて、戦争中の統制がはずれても、それほど簡単に納得できるものではありません。東京裁判で、いわゆる侵略戦争の戦争犯罪を問う「平和への罪」を構成する意図的な共同謀議などなかったのです。（中略）明らかに、ここには、占領政策の一環としての、あの戦争に関するアメリカの日本教化がありました。WAR GUILTY PROGRAM です」。

この日本占領の、米国の統治施策の公文書は、江藤淳が米国の公文書館での調査をまとめ、『閉ざされた言語空間』として 1989 年に世に出した。さらに、西尾幹二も GHQ が戦前の日本人の学問的労作の、真実を語っているがゆえに気に入らない著作群七千七百余点を眼前から消し去り、焼き捨てた焚書の事実を世に問うた。

私たちが、GHQ の『没収指定図書総目録』をみていると、西尾幹二が叫ぶように、この消された多数の本がもどらない限り、日本がなぜ戦争にいたったかの究極の真実を突きとめることはできない。

GHQ による占領期間中、強大な米国の軍事力ににらまれ、表面上は「虚構の物語」へと従属することになる。何しろ第 8 章でふれるように、当時のロックフェラー家の人々が、D デイ（真珠湾決行）の日時を知っており、日本をやっとおびき出せたとしてラジオの前で歓喜の声をあげて喝采していたのだから。（ジョセフソン、1948＝1991、260 - 264。フィッシュ、1976＝2014）

参考に、マッカーサーは後の 1951 年 5 月、米国連邦議会で「日本が戦争に突入したのは、大部分が安全保障上の必要によるものだった」と証言し、マッカーサー本人自身が日本の侵略を否定している。

植民地統治の歴史的事実から、欧米諸国の基本的な考えは、虚構のウソで騙される阿呆が悪いのだというものである。「洗脳」・「集団催眠」をかぶせて支配し、強者が利益を総取りの文化でもある。実際に、GHQ の統治として、秘密機関 CCD（民間検閲局）が、占領開始とともに水面下の活動を開始した。

山本武利の『検閲官　発見された GHQ 名簿』（2021）によれば、国立国会図書館の CCD 資料の中に、郵便物（信書）の秘密開封作業に雇用された日本人検閲官のリストが存在していた。「現時点では、1945 年から 49 年の検閲官の全国総数は、2 万人台と推定している。すなわち江藤の言う 2 倍の検閲官がいたと考えている」。

全国紙や NHK など巨大メディアに対して、すべての内容を発表前に、丹念に審査する事前検閲を GHQ は実施していた。「占領国どころか、アメリカは戦中から本国でも通信検閲を大規模に展開していた。その本国の経験や手法を、かなりの部分で日本でもドイツでも郵便検閲に取り入れていたのである」。

通信部門の中核であった郵便検閲は、マッカーサーに手紙、はがきの内容分析を定期的に提出し、彼の情報統制、日本人操縦と日本統治を可能にしたが、多数の日本人検閲官を雇用しなければならなかった。ただし、その費用は賠償金代わりに日本政府に負担させていた。

戦後の庶民から見ると民主化によって言論は自由になったと思っている。しかし実際は、江藤淳や渡部昇一たちが調べた通り「いつわり」の経緯であった。佐伯啓思はこう述べる。

「その背後に GHQ の検閲が控えており、その意味では、現に日本人の眼の前に提供され、人々が読むことのできる言論は、GHQ が「合格」としたものであった。実際、江藤さんの研

究によると、1946 年 11 月 25 日付けで書かれた検閲指針には、検閲によって削除、または発行禁止とされる項目が列挙されている。そこには、GHQ 批判は当然、極東軍事裁判批判、GHQ の憲法草案批判、さらには、アメリカ批判からロシア批判、中国批判、朝鮮人批判などが削除の対象とされている、という。しかも、この日付けは、あの言論の自由や国民主権をうたった戦後憲法の制定された 11 月 3 日のすぐ後だったのです。（中略）戦後の「言論の自由」とはこうしたものだった。鏡張りの空間にいる日本人にとっては、確かに、戦後いっきに「言論の自由」が社会を包むように見える。しかしこの空間をガラス張りにして眺めているアメリカ（筆者注：ぬいぐるみの中は国際的石油金融資本）からすれば、この「自由」そのものを管理しているのです」。　（江藤、1989。渡部、2010。佐伯、2015、173‐181、191‐195）

田中宏巳『消されたマッカーサーの戦い　日本人に刷り込まれた〈太平洋戦争史〉』（2014）によれば、当時に洗脳の道具に使われた、日本の各新聞社が連載の「太平洋戦争史」（共同通信社が翻訳）は、CI&E（民間情報教育局）が米国国内で工夫・編集したものと云われている。NHK ラジオが GHQ の指示に従って放送の「「真相箱」は、日本人への虚偽の洗脳に絶大な威力を発揮した。（桜井、2002。保阪、2003。田中、2014、71‐118。山本、2021、8‐33）

実際、1947 年 5 月の GHQ の公文書では、「日本での（信書やプレスへの）検閲工作は SCAP、占領軍、連合軍への辛辣な攻撃を防止するのに役立ってきた。日本の検閲は、民間のコミュニケーションのチャンネルの検査によって、力による転覆、闇市場、窃盗、スパイ、戦争犯罪、逃走犯などから占領軍の安全を守るための信頼できる情報を提供した」と報告書で自己評価している。

山本武利によれば、つまるところ、終戦当時、通期で日本国民の郵便は 2 億通、電報は 1 億 3600 万通開封され、電話は 80 万回も盗聴された。

参考に、有末精三中将（戦争終結時の参謀本部第二部長）は、1945 年 9 月 5 日にマニラのウィロビーに招かれた会合で、Ｇ－２の中に彼自身のインテリジェンス部隊をつくることになった。マッカーサーは彼らを通じ、東京裁判の遂行、ソ連の対日侵略防止目的の占領を効率的に達成した。CCD（民間検閲局）は、占領支配が相対的に安定した 1949 年 10 月 31 日に廃止された。

今日私たちが閲覧できるメリーランド大学の、「ブランゲ・コレクション」史料は、敗戦国日本の言論、通信が幅広く検閲された時期の、負の刻印（スティグマ）である。

山本武利によれば、秘密機関 CCD（民間検閲局）が閉鎖時、国外に持ち出した資料には、dispose（処分）、burn（焼却、焚書）といった言葉が出てくる。「これらの無機質な言葉の端々に、この米軍のやり方は、どさくさにまぎれて、敗戦国の資産を戦勝国が戦利品として無断に持ち去る行為であることを示している」。（サミュエルズ、2020。山本、2021、208‐250）

とくに、GHQ の神道指令においては、国家神道を否定したのみならず、個々人の積み上げてきた内面の精神の自由や、思想・信条の自由を破壊し、軽い人間に改造していくという大きな問題をはらんでいた。しかも、「公文書ニ於テ「大東亜戦争」、「八紘一宇」ナル用語乃至ソノ他ノ用語ニシテ日本語トシテソノ意味ノ連想ガ国家神道、軍国主義、過激ナル国家主義ト切リ離シ得ザルモノハ之ヲ使用スルコト」の禁止が、官庁と報道機関を含め、公に厳重に指令されていた。

さらに、深くとらえる保阪正康は、GHQ の施策をこのように指摘する。

「GHQ の言論統制、これは既存の考え方を解体して、頭のなかにあるキーワードを壊すわけで、旧体制の用語を使ってはいけないとか　―　その範囲と抑圧の手法はさまざまな書にも

書いてあるが　―　それがいまの日本のような（筆者補注；思考が劣化した）状態をつくり出した基盤になっているのではないだろうか」。戦時下の特高の検閲では、墨筆で伏せ字を強要しただけで、消された文字が類推できたが、GHQ の思想抹殺の方式は次元が違っていた。

「たとえば、この二行を削ったら他の文章を入れる。言論弾圧が行われていることが読者にはわからない形で行われた。これはやはり高度なテクニックで、日本の権力構造ではそこまでできなかった。そういう意味でいうと、アメリカのほうがたしかに役者が上だった。（中略）近代日本の最大の欠点というのは、植民地支配に関して、何のノウハウももつ必要がなかったということだろう　―　ノウハウをもっていないということは、実は本来は、“健全な国家”だったということなのだが。ノウハウもないから、かなり混乱してしまうわけだが、（筆者注：GHQ を構成する連合軍の）アメリカにしてもイギリスにしてもオランダにしても、そのノウハウが長い植民地支配で身についていた」。

一つの民族や国家を支配して、精神まで骨抜きにしてしまうことに関しては、超ベテランだったということだ。3S（セックス、スクリーン、スポーツ）、3G（ゴシップばら撒き、ギャンブル、ゲーム漬け）の側面もないとは云えない。

今日の言論空間において、「言語が空洞化するというのは、（筆者注：アイデンティティの根本となる国史を教えられていないから）無機質な国になるということである。無機質という意味は、実体が伴っていないということであるが、もっと明確にいえば、あらゆる事象に対症療法的な発想しかもてないという意味になる。このような国にするのが、あの時代の日本に対する GHQ の政策だったと思われる」。（保阪、2003、62 - 71）

GHQ（筆者注：金融石油財閥）が発明した、米国たちに都合のいい歴史や文化に取って替えられた今日の言語空間を（江藤淳は）「閉された」と呼び、今も劣化され続けている。

国民精神の、他国からの改造と、劣化操作のベクトルは大きな問題である。本稿を執筆の、一番の動機もそこにある。これが第一回目の占領政策の概要の経緯であった。

次の章では、1990 年代の第二の占領について、切り込んで考察してみよう。

８、国民の富が流出するように改造の「新自由主義」の施策

続いて 1980 年代においては、絶好調な日本経済の破壊と、日本を米国流新自由主義システムへの置換という、第二段階の占領の動きも見られた。当時に評判になったジェームズ・ファローズの『日本封じ込め』（1989）は、その発端の動きであったようだ。エコノミストの水野隆徳たちは、日本社会の制度インフラと、精神の改造プランの構図を、当時、このように鋭く見据えていた。

気乗りしない日本が、新自由主義（ワシントン・コンセンサス）を強要されたのは、橋本内閣時の金融ビッグバンであろう。あらゆる分野の「米国のルールが世界のルールとなり、米国のレフェリーが競争者をモニターし、米国のジャッジが勝負を判定する」ものであった。このルールに相当するのが、「BIS 規制」や「国際会計基準」、レフェリーに相当するのが「格付け会社」、ジャッジに相当するのが IMF、世界銀行、WTO、大会計監査法人などである。
（塩田、1994。副島、1998。水野、1998、245。本山、2007）

さらにその当時の虚偽の仕掛けを、佐伯啓思は深く分析している。

「そのために、日本国内の取引の「ルール」を変える。アメリカの土俵に日本を引きずり込んだわけです。同時に、90 年代に、アメリカは IT 革命を遂行し、金融工学などを駆使して、

製造業から金融中心の経済への転換をはかります。情報や金融部門でアメリカは、高いアドバンテージをとっていますから、日本に負けるはずはない。アメリカと同じ経済構造を日本に作らせて、同じ土俵に上げればアメリカは日本に勝てるということでしょう。（中略）実際、アメリカの市場原理主義的な経済学は、個人主義や自由主義、能力主義などについてのアメリカ社会の価値を色濃く反映している。それを背後に持っているのです。だから、それをそのまま日本へ持ち込むことはできないのです。それを無理やり持ち込めば、日本の社会や、日本人の価値観まで混乱をきたす。そしてそれが、結果として、日本経済を弱体化することは十分に想定されるのです。（中略）いずれにしても、アメリカは常に戦略的対象として日本を見ている、ということを忘れてはなりません。根本にあるのは、アメリカの国益という観点であって、常にそこに焦点を合わせて、日本を見ているのです」。（佐伯、2015、163 - 173）

西尾幹二もまた、ベストセラーの『国民の歴史』（1999）において、このように米国をみつめている。

第一次世界大戦後に米国と締結した「石井＝ランシング協定から、ヴェルサイユ会議を経てワシントン会議までのわずか 4 年ほどのアメリカの発言内容の変化を見ていくと、アメリカはルールを自分でどんどん勝手に変えていることに気がつく。これは第二次世界大戦直前の日米交渉史　―　最後にハル・ノートになる　―　のプロセスに関してもいえることである。そして、私はふと思うのだが、最近の貿易摩擦においても、アメリカは個別協議、輸出自主規制、構造協議、数値目標設定という具合に、次々と身勝手にルールを変えて、それをアンフェアだとはまったく思わない不思議な図太さがあるのだ。一国の政治の行動様式とはそうそう変わるものではないことがわかる。自分の出すルールを国際的ルールと定め、しかもそのルールを自分で変えていくのだからたまらない。（中略）アメリカの目的は最初から明白に日本の攻略であり、たんにその表向きの旗印が民主主義の教化である」。（西尾、1999＝2017、485 - 500）

1945 年の GHQ による日本の精神的基盤への介入、続いて 1980 年代後半からの、強いられた「日米構造協議」による金融インフラを含む「社会・経済システム」の、新自由主義流の「勝者が総取り型」、「社会関係資本の荒廃」への根本的な改悪であった。

さらに西尾幹二は、一番肝心な心構えを再度、国民に提示している。

「政府の特使となった松本前駐米大使が帰国後テレビで、米国は日本人のために有難いことを言ってくれたのだから、日本人は米国に譲歩したとか内政干渉されたとかいう風に考えないように、と語っているのを聞いて、私はひどく吃驚（びっくり）した。外国の方から、日本人のためになると称することを外国の価値尺度で云われた、だからこそ警戒しなければならないのではないか」。

「言うまでもなく、自国を裁く基準を外国（筆者注：虚偽の戦略的言説）に委ねることになるからであり、その結果として、他の外国がこの手に乗じて、同じ圧力による譲歩の形式を（筆者注：日本の教科書他への内政干渉のように）日本に期待するようにもなるからである。私に言わせれば、これはほとんど外交上のイロハである。国家意思を具えた普通の国家が真っ先に警戒することである。ところが日本では外務省が率先して外交上の理性に反した行動をする」。

「この誤算は大きい。（筆者注：重要なポジションにエージェントたちを送り込まれた）日本外交の甘さである。（中略）「構造」はそんなテーマではない。日本の国家存在そのものを協議対象にするという話なのだ。外務省は事の重大さを分かっているのだろうか」。

「アメリカ的公正、自由競争は、極端な貧富の差、冷酷な人間関係を生んでも省みない。米国と言う国家は世界史の中のきわめて特殊な現象というべきである。米国流の自由競争が普遍

価値があると考えるのは錯覚である。日本が米国から見て異質であるなら、米国は日本から異質である。お互い様である」。「欧米主導の進歩主義・自由主義が今や行き詰っている現代の思想状況の中で、敢えて再び欧米の「自由」を、自国を打ち据える錫杖（しゃくじょう）として、有難く押し頂こうというのである。何という時代錯誤の愚行であろう」。

大量破壊兵器があると口実をつけてのイラク戦争。そのイラクでも東京裁判と同じような裁判が演じられたが、世界のマスメディアはどこも、その偽善にあえてふれない。ここに世界構造を読み解く根本のカギがある。

元外務省官僚の原田武夫は、当時の日米間の経済関係をこのように鋭く分析していた。

「ここで思い出していただきたいのがこれまでくり返し述べてきた、中南米における米系投資銀行（とりわけゴールドマン・サックス）の役割である。「独裁政権」から民主化を遂げた1970年代の中南米諸国では、「左翼独裁政権」が両手に抱えていた虎の子である「国営企業」をいっせいに民営化させた。その際、これらの中南米諸国にはまともな証券市場すらなかったくらいであり、「民営化　⇒　上場」を目指す政府に対し、徹底した指導を行い、結果としてニューヨーク市場へ上場させたのが米系投資銀行であったわけである。ここで仮に「中南米における国営企業」を、「日本における特殊法人」と置き換えたならばどうだろうか」。

つまり、非常に大雑把な言い方をすれば、ここには中南米、ASEAN諸国、韓国、ロシアと、世界各国で「危機」が生じ、その解決策として「民営化　⇒　上場」が行われたときに米系投資銀行が、待ってましたと、大儲けしたのと同じ「ビジネス・モデル」が作用している。

「米国が建国されて以来の、最高統治集団としての「奥の院」の下、政・軍・官・財・学のエリートが、柔軟な労働市場の中で相互に連携・作用しあうこと（回転ドア式慣行）で、（他国の）「国富の移転」をキーワードとした国家戦略が策定され、これが現実に政策として実施されていくのが米国の外交である。（中略）そのようななか、米国が用いたのが「構造改革」というマジック・ワードであり、「書割変更」としてのアジア通貨・経済危機あるいは会計制度の国際標準化、BIS規制といった出来事であり、さらにはインターネットの普及と米国にとってのヒューマン・インテリジェンス・ネットワークの日本国内における拡大と浸透であった」。

「その構造＝システム、すなわち米国が国富移転のターゲットとしてとらえた日本の「利益確定」のためのツールが、日米外交当局間で「静かに」交換され、折々の日米首脳会議において「確定」される「年次改革要望書」（日米規制改革および競争政策イニシアティブに基づく日本政府への米国政府の年次改革要望書）である」。（原田、2005、216 - 245）

現在では、いちいち毎年に対面交渉しなくても、自分たちへ日本の国富が、連続的に流れる「構造」システムをつくりあげ、かつ日本の官僚機構に、米国の命令に従う上級ワーカー・ネットワークを埋め込んだかのようにも見える。

いずれにしても、この「ビジネス・モデル」に急襲されたあとの、世界中の国々の、社会関係資本と産業・経済の荒廃と人間の廃墟を、ナオミ・クラインは『ショック・ドクトリン』で詳述し、告発したのである。クラインは、国際金融集団によって人工的につくられた、1998年前後のアジア通貨危機の悪行などについても詳述している。（クライン、2011、657－669）

さらに、外資が持ち込む「だましのM&A案件」のカモにされ続け、高額の国富が流出している現状がある。東芝のWHの原子力部門、日本郵政が2015年に買収した豪州物流企業や、武田薬品工業の顛末などがよい教材である。1980年代、M&A仲介の米投資銀行ザ・ブラックストーン（TBG）の仲介での、三菱地所のロックフェラー・センター買収なども氷山の一角の事例だ。

仲介者が買って下さいと依頼して来ても、相手側の本当の企て・戦略は何かを見抜いて断るくらいの判断力が問われている。結局、高額の仲介手数料を支払い、日本企業が悪者にされ、採算的にも大火傷の教訓に学んでおらず、日本企業がカモにされ続けている。

（歳川、1991、1995。大村、2017）

6 兆円で英国（本社はアイルランド）のシャイアー社という同業を買ったのに、「なぜか逆転して乗っ取られた。逆買収だ。武田の真面目な研究開発部門は解体されてしまった」現実がある。「この 10 年ぐらい、ROE 投資（自己資本利益率）という悪質な金融手法（錬金術）が蔓延（はびこ）っている。企業が借金を増やして、1 株当たりの自己資本を減らして世界の同業他社の株を買い漁るという不愉快きわまりない M&A（企業乗っ取り、買い取りのやり方）がのさばった。借金と自社株の希釈化（水増し）ばかりが進んで、日本の大企業はアメリカに大きく騙された。その典型が、老舗製薬会社である武田薬品が嵌められたケースだ」。

（副島、2020、141 - 143）

経済学者の伊東光晴は、外資の投機筋に空売りで株価暴落を仕掛けられ、資金繰りにゆきづまり、ついに債務超過で倒産させられた北海道拓殖銀行や山一証券にふれている。倒産後の株価 1 円、2 円で株券返却のため買い戻された大量の数量から、投機筋の利益は少なく見積もって、拓銀で 300 億円以上、山一では 1800 億円をこえると思われる。　（伊東、2006、142）

さらに『経済人類学』の著者栗本慎一郎も、鋭く状況を捉えていた。

海外からの金融資金の動き、「その結果、この資金の一部が日本の証券市場に「外資」として流れ込み、株価を簡単に上下させていたことはよくわかった。（中略）それによって野村證券をはじめとする日本の証券会社がズタズタにされ、山一証券は潰れたのである。当時、日本の株価総額は三百数十兆円だったから、日本の全産業の株を五一パーセント以上買い占めるためには、一八〇兆円くらいあれば十分である。生産にかかわる企業に絞ればその額はもっと少なくなって、百兆円もあればお釣がくるわけだ」。

「日本でグローバル・スタンダードという言葉が盛んに使われるようになったのは、1998 年ごろからのことで、2000 年にはお題目としてさらに強化され、そして K 政権に至ってまことに露骨な錦の御旗となった。繰り返すが、「グローバル・スタンダードにのっとれ」という主張は、裏を返えせば「グローバル資本に乗っ取られろ」というのが（筆者注：無責任な政策）その本意である」。　（栗本、2005、124 - 129）

私たちの国民経済が、散々収奪の対象になっているという事実から、打開策を考えていこう。

欧州の科学人類学者のブルーノ・ラトゥールは、現代の「軍産学メディア複合体」を統御する巨大な金融財閥などによる「虚構の言説」を、普遍性を問う立場から深く見据えている。

従来の GATT の協定では、合意された貿易ルールが侵害されても何ら強制力ある制裁を持ち合わせていなかった。だが、今の WTO は、ルールを破った参加国に対して重い経済制裁・処罰を科す権力を持つようになった。

例えば、「WTO（国際貿易機関）」は市場原理主義に基づく、貿易だけを対象とする閉じられた法体系をつくり、さまざまな国際法を一切参照しないという一連の操作によって環境問題、社会問題が入り込まない〈純粋な〉市場原理主義の〈経済空間〉をつくっている。その空間内では、世界の諸国に経済制裁を通じて、関係者の操作を誰も邪魔できないため、実質的に WTO という装置を国際政治経済の一番上にのせることに成功する」と洞察する。

（ラトゥール、2008、312 - 318）

その結菓、当然に、様々な領域で支離滅裂な、矛盾する事態が発生してくる。そこで、次の

章では、当時、約 200 兆円にのぼる国民の貯金を預かる郵政公社などが、なぜに無理に民営化（市場への放出）されたかの背景の、不思議な世界の立体的な構造をながめてみよう。

９、民営化・株式上場とシニョリッジ権（基軸通貨特権）との関係

日本において異常に見えるのが、2020 年代に入っても未だに、新聞、雑誌、テレビの主流の媒体が、相変わらず「民営化（私営化）」は良いものだというキャンペーンを続けていることだ。これだけ米国流の新自由主義に食いつかれて、国民も日本社会もボロボロにされているのにもかかわらずである。当然に、新自由主義に一番被害を受けている、まともな働き口の少ない若い世代は、白けて旧態依然の既存の媒体を捨て、ネットにて、元凶である「異常な世界の構図」の真実を知ろうとする。

よく勉強している中堅の優良企業のオーナーには、自社の株式を上場しない方々が多い。なぜなら、今のドル覇権はシニョリッジ権、すなわち FRB は原理的に、必要があればいくらでも無限に基軸通貨であるドル札を自分で刷ることができる。1989 年末の日経平均 3 万 8915 円が、「先物制度（投入できる資金量の大小で売りと買いの攻防の勝敗がきまる）」下の外資の空売り攻撃で崩壊したのと同様に、民営化で株式上場することは、長いスパンでみるなら、傘下の経済主体たちに徐々に株式を取得され、最終的には所有権・経営権が移転してしまう可能性が大きい。もちろん、さまざまな経営指標で、それだけ価値のある事業体での話である。（リュエフ、1973。Sutton、1975。広瀬、2002a。山田、2008。朝倉、2010。若狭、2015）

長い間、《若者たちの貧窮化》を許している間に、人口の減少が急加速している。軍事同盟を結んでいても、水面下では国富争奪の経済戦争が、粛々と行われていることの、大局の意味に気づかない人が多い。どの国も、能天気な政権主脳にわざわざ忠告はしない。それが、冷酷非情な食うか食われるかの、ゼロサムゲームの国際間の政治経済競争のリアルな現実である。「軍事紛争」以前の、「平時の経済戦争」の方がより重要なのである。

軍事同盟とは別の次元の話だと、国のトップが毅然と国民を守る意思表示をして、行き過ぎた新自由主義的施策を緩めねばならず、それによって失うものは何もない。なぜなら放っておいたら確実に、先に私たちの国家が自然死を迎えるからだ。弱体化してその国が頼って来れば、その同盟国は、弱体化した国を損傷の大きい手足として、さらにこき使ってもっと壊してくるだけのことである。

この「新自由主義システム」が 20 年間も続いたため、すでに、低い収入の大多数の男女が、結婚も子孫を増やすのも困難な事態になっている。内政干渉が強化された 1990 年代後半から 2000 年代前半にかけて、わが国での経営破綻・生活破綻などによる年間の自殺者の数が、3 万人を超えていた年もあった。

このまま「新自由主義・グローバリズム」という収奪の「ビジネス・モデル」、つまり、まともな社会を破壊する「社会・経済システム」を放置すれば、比較的に短い期間で、疲弊の進行が倍速化して、私たちの縄文時代から続く《共同社会》は自然死を迎えてしまう。そこまで事態はひっ迫していることを、国民も、国家の中枢の責任者も理解しなければならない。

どこの国においても、国民の貧窮化で一番の被害者が子供たちである。

米国の社会学者ロバート・パットナムは、『われらの子ども　米国における機会格差の拡大』（2017）において、多数のインタビュー・データの蒐集・分析で、米国の若者間の階層的格差と民力低下の実態を見事に浮き彫りにしている。

「地域の豊かさから来る恩恵は裕福な子どもに集中し、地域の貧困から来るコストは貧しい子どもに集中してしまっている。近隣地域間の不平等が大きくなると、上方への社会移動の割合が低くなり、そして機会格差は拡大する。このことの、社会的文脈が（家族や学校と切り離したときでさえも）子どもの人生の成功可能性をどれだけ強力に条件付けるか、についての有力な説明である」。

機会均等と社会的移動性のリサーチのため、ヤングアダルトとその親に対して「将来の希望とその見通しを思い出すように求めた。

パットナムの故郷のオハイオ州ポートクリントンはじめ、ミネソタ、ペンシルベニア、ジョージア、アラバマ、テキサス、オレゴン、カリフォルニア、マサチューセッツへとサンプルを拡大して、シルヴァたちはインタビューして回った。

比較的に、労働者階級のヤングアダルトの追跡・調査が困難だということが判明したのは、「彼らの居住状況が急激に変化し、また料金不払いによって電話がしばしば止められてしまうからだった。

労働者階級の子どもと連絡を取り続ける最良の方法は、フェイスブックということになった。電話番号が頻繁に変更されても、そのアカウントは生き続けていたからである。（中略）われわれにとって厳しい現実となったのは、父親が投獄されている、ドラッグ中毒である。虐待的である。あるいは単に自分の生活から消えているので彼にはインタビューできないと労働者階級の子どもたちが相次いで告げてきたときだった」。（パットナム、2017、244 - 253、293 - 303）

そして、パットナムたちの問題意識をもっと巨視的かつ社会構造的に、米国の状況を分析した先駆者が、エマニエル・マン・ジョセフソンの『The Strange Death of Franklyn D Roosevelt, A History of the Roosevelt –Delano Dynasty, America's Royal Family（邦訳名：ルーズヴェルトが 20 世紀をダメにした」）』1948＝1991）であった。

米国における石油・金融資本の特異な仕組み・社会の劣化を分析し、「社会・経済システム」の立体構造に迫っている。

このエマニエル・マン・ジョセフソンの『ルーズヴェルトが 20 世紀をダメにした』(1948) や、エドワード・ミラーの『オレンジ計画　アメリカの対日侵攻 50 年計画』（1994）、ロバート・スティネットの『真珠湾の真実』（2001）、ハーバート・フーバーの『裏切られた自由』（2017）などが、大東亜戦争の隠されて来た真実を白日の下にさらけ出している。

さらに、米国 NSA が 1995 年から公開した『ヴェノナ文書』により、アルジャー・ヒスやハリー・デクスター・ホワイトなど米政権中枢部のソ連のスパイが、日本への侵攻戦略に影響を与えた。すくなくとも 200 人以上のソ連スパイが米連邦政府職員として活動し、政権中枢へのソ連の浸透の深さは深刻であった。監訳者は「ルーズヴェルト政権というのは、いったいどんな政権だったのか、と改めて思わざるをえない」としている。

（ヘインズ＆クレア、1999＝2010、488 - 499）

上院議員のハミルトン・フィッシュによれば、当時「自分を含め連邦議会の議員の誰も、「ハル・ノート」という最後通告を、ルーズヴェルトが日本に送ったことを知らなかった。第二次世界大戦中、ルーズヴェルト大統領は、110 億ドルの借款供与と、武器貸与法でなんとソ連に 2 万機の航空機と 40 万台のトラックを提供した。おカネの力で、「ルーズヴェルト神話の書物の洪水である。おそらく現在（1976 年）でも、騙されていたことを知るアメリカ国民はほとんどいない、おそらく人口の 1%もいないだろう。われわれは、なぜあの第二次世界大戦に巻き込まれてしまったのか。その真実をそろそろ見極めるときに来ている」。

（フィッシュ、1976＝2014、320）

大東亜戦争 2 年前の 1939 年には、戦時資源局長官に US スティールの会長ステティニアス（のちの国務長官）が任命された。大統領のためのステティニアス国務長官の報告（国務省出版物・2349 号の 20 頁）の公文書は、次のように述べている。

「1939 年が終わる前に（つまり米国が参戦する 2 年前）CFR の提案で戦後問題のための委員会がつくられた。この委員会は国務省の高級官僚からなっていたが、《一人を除いて残りの全員は CFR 会員だった》。これは CFR によって配置され、出資され、指揮されるひとつの研究陣に支援されていた。この研究陣は、1941 年 2 月に同省の《特別研究課》の中で組織され、CFR の俸給名簿から同省の俸給名簿に移し替えられた。パール・ハーバー後、研究規模は加速度的に拡大し、戦後問題のための省内委員会は、戦後外交政策のための顧問委員会に組織替えされたが、その全員が CFR 会員で占められた」とある。

（マクナマス、1993、219‐221）

スタンダード石油の独占トラストは、20 年以上前の 1911 年に 34 社に解体されたはずだった。しかし、「トラスト総本山のエクソンからカルテックスに幹部が送り込まれたのだ。しかも、モフェットはスタンダード石油３社幹部であると同時に、ルーズヴェルト大統領から石油政策を委任された国家行政の指導者であった。サウジに入ってきたのは、石油会社というよりアメリカという国家そのものだったのである。こうしてサウジで 1935 年に試掘井の第 1 号を掘り始めてから 3 年後の 1938 年 3 月、ついにアラムコが初めてダーラン近くのダンマーム第 7 号油田で、商業規模の油田採掘に成功する日が訪れた」。（広瀬、2002b、147‐157）

ジョセフソンは、それに関連してこのように述べる。それ故に「まずルーズヴェルト内閣の閣僚の主流は、彼ら一味から採用された。メンバーには、スタンダード・オイル社シカゴ地区代理人のハロルド・イッキーズ内務長官、ロックフェラー財団医療社会福祉担当のフランシス・パーキンズ労働長官、ロックフェラー輩下のヘンリー・A・フォーレス農務長官、石油実業家ジェシー・ジョーンズ、それにロックフェラー財団医療社会福祉担当でかつルーズヴェルトの政策を管理する主要ニュー・ディール執行官のハリー・L・ホプキンスなどがいた」。

その後、戦時石油局長となったハロルド・イッキーズは、1943 年 8 月に設立された石油公社の初代総裁として石油行政を牛耳り、ロックフェラー財閥の石油利権を守った。

「そしてこれは歴史上初めてのことだが、アメリカの大統領が、あえて公然とロックフェラー家の人を公職に　―　つまりネルソン・ロックフェラーを半球防衛調整官という超戦略的な役職に　―　任命した。ルーズヴェルト治下の合衆国政府とは、こうして全体的にロックフェラー帝国に従属的となり、同帝国の世界制覇を可能にした。J・P・モルガンの甥ジョウゼフ・グルーを駐日大使に任命して、パール・ハーバー、中国におけるロックフェラー・スタンダード・オイル資産の救護、そしてロックフェラー帝国による日本の完全征服の伏線を敷いた。同時に合衆国政府は、幾万ものアメリカ人の生命と国富の大部分を犠牲にして、莫大な埋蔵量を持つサウジアラビアおよびその他の近東油田の支配を、彼ら財閥に与えたのである」。（ジョセフソン、1948＝1991、219‐227。サンプソン、1976。広瀬、2002b）

ジョセフソンによれば、CFR を率いるロックフェラー家は、日本艦隊の真珠湾攻撃の日時までを正確に知っていた。彼は、F・D・ルーズヴェルトたちの動きをこう述べている。

「日本人をそそのかして合衆国を攻撃させようとの入念な計画は西欧外交界では常識であったが、それを言うことはこれまでは「道徳」違反だと考えられてきた。しかしウィンストン・チャーチル内閣の生産大臣オリヴァ・リッテントン海軍大佐が、1944 年 7 月 20 日議会で次の

ように述べた。「日本は駆り立てられてパール・ハーバーでアメリカを攻撃した。アメリカが参戦を余儀なくされたというのは、歴史上のお笑いごとである」。

これこそ、1944 年 10 月 8 日付「ニューヨーク・タイムズ・マガジン」誌に載ったキャスリーン・マックラフリンによるエレノア・ルーズヴェルトへのインタビューで、例によって機知よりも口先のうまいエレノアが、パール・ハーバーについて次のように述べた言葉の真意なのである。

「12 月 7 日はわたしたちにとっては、ちょうど別の D - デイ（訳注 : 対独総反撃行動開始予定日）のようなものだった。わたしたちはラジオに群がり、さらに詳報を待った。　―　しかしそれはこの日が国全般に与えたショックとはまるきり違っていた。わたしたちは永い間なにかこの種のことを期待していたのです」。

「彼女の述べたことは、実は非常に意味深長であった。D - デイというものは予め最高司令部にはわかっている。この D - デイがルーズヴェルトと側近たちにわかっていたことは疑いない。ルーズヴェルトのデスクには、すでに攻撃の何時間も前に、日本側からワシントンの使節団当てに送られてきた「東の雨風」と呼ばれる暗号電報の解読文が置かれており、これには、日本は次の日にパール・ハーバーを攻撃するつもりであると述べられていた。しかし彼はわざと国家とその防衛者たちを裏切り、彼らになんらの警告もしなかった。反対に、彼らには外部の危険信号を無視するよう指示されていた。全歴史上、いかなる国にしろ、その最高責任者によるこれ以上の反逆行為が存在したためしはない」。

さらに、ジョセフソンは言葉を続ける。

このことは、ロックフェラー家に連なるウィニフレッドの夫、ブルックス・エメニーへの書簡において、下院議員の「ボルトン夫人は、自分が彼やロックフェラー家のボスたちに「教導」されていることを自ら認めた。そして彼女も仲間も 12 月 7 日のパール・ハーバー攻撃を待ち受け「祝賀した」とのべている」。（ジョセフソン、1948＝1991、260 - 264）

また、大統領の娘アンナの前夫ベティジャー氏は、キンメル将軍（解任されたハワイ海軍責任者）への手紙で「真珠湾前夜の 12 月 6 日のルーヴェベルト家全員のディナーの際、食事中、大統領は中座し、やがて戻ってきて『戦争は明日始まるよ』と言った」と証言している。

（ドール、1991、20）

ルーズヴェルト大統領の情報源により、11 月 27 日に、ウィリアム・スティーブンスンは《日本との交渉決裂、軍は 2 週間以内に行動するだろう》とロンドンに打電している。（ハイド、1979、270 - 272）　前述の、米国が参戦する 2 年前の、CFR スタッフが中心となった国務省の会合のテーマの中には、いかにして枢軸国側を壊滅のうえ、中東の原油を独占的に押さえ、ドルの基軸通貨発行権（シニョリッジ権）を確立するかであったという説もあるようだ。

実際、戦争末期の 1944 年に、日独伊不在の中でブレトンウッズにて、米国のホワイトと英国のケインズの駆け引きはあったものの、世界通貨としての「ドルの覇権」（シニョリッジ権）が確定する。

エドワード・ミラーたちが指摘するように、のちの国務長官ディーン・アチソンは、開戦の 2 年前から執拗に日本への挑発を繰り返した。　（ミラー、1994、2010。西尾、2013）

H・フーバー元大統領の『裏切られた自由』（2012）が世に出た以降の今日では、『東條英機封印された真実』（1995）の見立てが、大きくは支持されているように見える。

つまり、日本において「第三次近衛内閣の退陣したあと、東條ならぬどの様な賢明で有能な政治家がその衝に当ったところで、所詮日米開戦は避けられなかったであろう。それは日本側

の対応如何の問題では決してなく、アメリカ側に、日本を戦争にひきずり込み、二度と起き上がれぬほどに打ちのめすのだという、半世紀来の鉄の如くに冷徹な意志が固まっていたからである」。　（佐藤、1995、300‐311。保阪、2003。加瀬・藤井・稲村・茂木、2016。渡辺、2017）

次の章では、大東亜戦争後 75 年目の、今日の「社会・経済システム」の粉飾をはいだ、国民の富が流出する、仕掛けられ、埋め込まれたメカニズムを検証していこう。

10、世界を読み解く理念型の「軍産学メディア複合体？」の考察

すでに 1913 年の時点において、ヴェルナー・ゾンバルトは、国際金融と戦争事業こそが、世界経済の擬制の手品の種である側面を見抜いていた。ゾンバルトは、フッガー家の時代からロスチャイルド一族の時代までの、戦争事業の儲けの魅力、及び戦費調達と国際金融の利益の密接な関係を洞察している。　（ゾンバルト、1913＝1996）

この章の表題「軍産学メディア複合体」に？を付けてあるように、現代世界が「軍産学メディア複合体」であるとは短絡的に断定をせず、不可思議な現代の「社会・経済システム」をさまざまな視点から点検していこう。

一番不思議なことは、たとえば 1985 年に、経済学者の松村文武が『現代アメリカ国際収支の研究』で問題にしたように、1971 年（ニクソン・ショック）以来の、米国の双子の赤字の垂れ流しが破綻せずに、そのまま続いていることである。2021 年現在で、50 年間も国家財政が破綻せずに続いていることになる。

松村文武は、米国以外の経常黒字国が、そのドル残高を米財務省証券に運用して、米国の国際収支赤字をファイナンスするという、黙示的な世界権力傘下の、ドル防衛協力システムを「体制支持金融」という概念で定式化した。（松村、1985、168‐181）

同時に、1971 年以来、一般的に、団塊の世代が懸命に働き続けて、約 40 年間にわたり、企業も個人も多額の納税をしてきたにもかかわらず、日本人の手もとに「国富」が貯まらず、米国債を買わされ続け、国民の富が海外へ流出し続け、挙句の果てに政府予算の半分近くが赤字国債となった。これはどういうことなのか。

第 7 章で、GHQ に管理されていた戦後の「閉された言語空間」に言及した。その後も、わが国の国富の流出に警鐘を鳴らした『マネー敗戦』（1998）の吉川元忠、米国による日本の改造の進行を警告した『拒否できない日本』（2004）の関岡英之、『金融鎖国　日本経済防衛論』（2002）の副島隆彦、『「No」と言える国家　奪われ続ける日本の国富』（2006）の原田武夫など多数の愛国の論客が、大局的には新聞や放送業界から冷淡に扱われ続けた。

その結果、文字通りに、関岡英之＆吉川元忠の共著『国富消尽　対米隷従の果てに』（2005）となってしまった。経済社会は疲弊し、多くの非正規労働の若い世代が、結婚そのものと子育てが困難となって、人口減少が加速度的に進んでいる。

米国の保守派の重鎮、パトリック・J・ブキャナンも、2011 年の時点でその不可解な現状に、こう問いかけている。

「３年にわたってアメリカ政府は、３ドルの税収に対して５ドルを支出してきた。ということは、市民、企業、外国の持つ国家、公共機関の債務がそれだけ増えたことを意味する。歳出削減だけで予算を均衡させようとすれば、歳出は 40%にまで減ってしまう。増税だけで均衡を図れば。企業と個人の税率は 67%増加させなければならない。（中略）共和

党が増税に抵抗し、民主党が社会保障を死守する以上、深刻な収支不足を解消する妥協の図られる可能性はきわめて乏しい。世界はそのうち、アメリカが借りたカネと同じ価値のドルで返済することは絶対に出来ないと認識するだろう」。

「国家安全に無関係な対外援助の停止。国連で中国を支持する国々への直接援助、ないし世界銀行経由の間接援助をするために中国から借金することほど馬鹿げたことはない。（中略）2000 年から 2010 年まで、アメリカでは 5 万の工場が閉鎖され、600 万の雇用が消滅した。中国、日本、EU、カナダ、果てはメキシコまで、数千億ドルから兆ドル単位の貿易黒字を合衆国から稼いでいる」。

「失業率が 6 %に下がるまで移民を制限する。2300 万のアメリカ人がいまだ不完全雇用ないし失業状態にあるときに外国人労働者を呼びこむことは、国家よりも企業利益を優先するものにほかならない。（中略）修正第 14 条の、不法移民の産む子どもも自動的に合衆国市民権が与えられる、という誤った解釈は、議会で修正し、連邦地裁ないし連邦最高裁の見直しの対象とはならない、という付則をきめておく。合衆国政府は、大量の不法移民を雇用する企業に介入する綿密な規制を考えなければならない。この非愛国的な慣習の抑止には、違反者の厳罰処分が最良である。議会は英語を合衆国の公用語とする憲法修正を行い、各州に通知する。これら諸提案は、国家の生存にかかわる事項である」。

（ブキャナン、2012、517 - 531）　以上のことは、トランプ政権でも目指され、移民受入れから発生する諸問題は、今後の日本にも当てはまることでもある。

一般的に、社会科学において、アイゼンハワー大統領が危惧した「軍産複合体」の通常の定義は、「軍部・兵器産業・研究機関・情報媒体機関・投資ファンド・国際寡占資本の《利益集団としての超国家的結合体制》」とされている。もちろん、これらに働く人々は、自分の仕事が果たしている全体的に統合されたのちの、人類という「全体社会」を破壊する恐るべき機能については、まったく想像したこともないものであろう。

中山智香子たちによれば、「軍産学メデイア複合体」、つまり科学・軍・産業・政治とメディアの複合体の概念は、大戦間期から戦時期、戦後の米国（ランド研究所）の実態を象徴している。「軍産学メディア複合体」のもとでは、「戦争機械として国家が、平時と戦時を同じ論理で運営・マネジメントしていた」と見ることもできる。（アベラ、2008。中山、2010、159）

この唯我独尊の体制の理念型（イデアル・ティプス）から類推して、仮に 1980 年代からの「日米通商交渉」を考察すればどうなるだろうか。傘下のメディアを使い、「虚偽の言説」・「集団催眠の網」をかぶせた側が、利益総取りの側面があるからである。

「日米構造協議」において発明された「非関税障壁」の概念は、新自由主義を広める米国（金融財閥勢力）の戦略的「言説」の広報作戦により、海外の「グローバル企業が拡大展開する際に障害になりうるすべての事象」を意味する、壮大な詭弁になっていった。

日本国民の生活の安定や安全に寄与するための、縄文時代から連続する伝統的な社会的慣習や、普遍妥当性がある、思慮深い公的な規制や制度のすべてが、詭弁の論理により、この「障壁」に勝手にカテゴライズされたのである。ここが根本的に重要なところである。

紀元前から続く古神道などの大宇宙哲理の普遍性に基づくクニのカタチ、つまり国民をあまねく富ませる「社会システム」の根本原理に、土足で踏み込まれ、壊され続けている現状である。（西尾、1999＝2017。原田、2005。若狭、2015。森田、2021g）

さらに、日本のお家芸であった半導体製造が、作為的にどのように衰退したか、にもふれておかねばならない。1980 年代の日米半導体交渉において、半導体は安全保障そのものだという

強引な理屈をつけて、米国の通商代表部（USTR）が攻めてきた。朝倉慶たちは、米国のごり押しで、日本が取り返しがつかない大損をした顛末をこう概説する。

「そのときに結ばされた「日米半導体協定」の契約内容はかなりえげつないものでした。というのは、日本は外国製（要はアメリカ製）の半導体を２割使用しなければならないというもので、数値目標まできっちりと明文化されてしまった。1986 年のことでした。インテルはじめ当時のアメリカの半導体メーカーは、技術的にまったくオソマツだったので、日本が輸入すればクズを買うようなものでした。ではどうするか。結局、日本の半導体メーカーのエンジニアをアメリカに派遣し、技術を教えて、その技術で半導体をつくらせて、日本に輸出させて、それで 2 割という目標を達成させたわけです。まったく馬鹿げた話だけれど、本当にそれをやらされた。これでは半導体製造の（日本の）技術者がやる気を失うのは当然でしょう。日本はまさにアメリカに半導体産業をブッ潰されたのです」。

その後、外資による東京株式市場での先物制度の空売りや、BIS 規制の縛り、格付け会社の勝手格付けのレーティング評価下げなどで、ますます景況は深刻さを深めていった。

「次から次と日本は不況のスパイラルに陥っていまい、半導体産業もやむを得ずリストラに踏み切るしかありませんでした。そうした日本の半導体産業のリストラ要員を全部囲い込んだのがサムスンだったわけです。「来てください。教えて下さい」と。ここから韓国の半導体メーカーが一気に台頭してくる流れができたのです」。　（朝倉、2019、30、28 - 64）

白井聡が『国体論　菊と星条旗』（2018）で述べるように、まさに私たちが無用心だったのは、「「グローバリゼーションへの対応・推進」の名の下に、アメリカに本拠地を持つ場合の多いグローバル企業が、日本の市場へ参入する道筋をつくるものだった。「市場への参入」と言えば穏やかに聞こえるが、その実態は生易しいものではない」。

「日本の場合、際立っているのは、こうした動向に対する批判の声があまりにも小さいことである」。「ひとことで言えば、「異様なる隷属」である」。（白井、2018、289 - 306）

したがって当然に、国民が頑張って創出した富も利潤も、大半はあいかわらず海外へ流出する流れで、雇用はあっても一時的な短期・非正規雇用ばかりで、有能な人材を正社員として長期的に育てる余裕のある企業が減っていくばかりとなった。当然に、若者の結婚も子育ても非常に困難となり、人口減少が進行を深めていく。

1990 年以降の、対米追従の政権によって過剰に譲歩され、働き口を喪失し、生活保護や路上生活に追いやられる国民が増えるばかりである。

象徴的な事例が、アマゾンの国内売り上げ増と、国民の総体的な貧窮化の進展が、正比例で推移している現実である。昭和 30（1955）年から 45（1970）年代まで存在した、国民の共通意識であった、国産品愛用の気概はどこへ行ったのだろう。自国製品・自国サービスを愛用することは、どこの国でもお互い様であって、何も悪いことではない。メイドイン・ジャパンの生産やサービスの企業を応援することが、国防と安全保障政策の基本中の基本であることの、原点に立ち戻らなければならない。

世の中は天才ばかりではなく、大多数の普通の人々の尽力によって成り立っている。そのそれぞれの一隅を照らす人々が、安定して家庭を持ち、子供を育てるだけの収入を得るかつての 1990 年代までの、分厚い中間層をもつ「社会・経済システム」を目指さなければ、縄文時代以来の私たちの「全体社会」は先に崩壊してしまう。それらの根本にふれない「金融・石油資本の大財閥」傘下の、エリートが利益総取りの、グローバリゼーション宣伝部隊の狸（広告主に依存するマスメディア）にバカされ、江藤淳たちが見破った「虚

偽の言説」に、75 年間も侵され続けている。　（カジェ、2015。若狭、2015）

内橋克人たちが『誰のための改革か』（2002）で述べたように、世界経済構造ないし国際金融メカニズムの基本中の基本を理解し、米国流新自由主義に盲従ではなく、発想を変えて対策を講じなければ、孫やひ孫の生活水準は、まだまだ落とされていくであろう。

ところで、マイケル・ピルズベリーは、『China 2049』（2015）において、このように回想している。

「レーガンは、わたしを含め、彼の政権を支える中国専門家の大半より鋭く、中国の本質を見抜いていた。しかし、表面的には、中国を強くしようというニクソン・フォード・カーター路線を踏襲し、1984 年の NSDD140 では「強く安全で安定した中国はアジアと世界の平和を保つ力になるはずなので、その近代化を助けよう」と述べている。レーガンは、中国に武器を輸出して軍事力強化を支援し、台湾への武器輸出は削減しようとする指示書に署名した。

しかし前任者と違って、重要な意味を持つ但し書きを添えた。それは「対中支援は、中国がソ連からの独立を維持し、独裁的体制の民主化を図ることを条件とする」というものだ。（中略）ジョージ・クライルの著作、『チャーリー・ウィルソンズ・ウォー』では、他の CIA 幹部がさらに大きな秘密を暴露した。それはアメリカが中国から武器を 20 億ドル分購入し、反ソ連のアフガン反乱軍に提供したというものだ。キッシンジャーの回想録は、アンゴラでも米中は秘密裏に協力したと語っている」。この当時の日本は、米国との約束通りに、厳粛に、ココム（対共産圏輸出規制）のルールを守っていた頃である。

「そして 1986 年 3 月、レーガン政権は、遺伝子工学、知能ロボット工学、人工知能、自動化、バイオテクノロジー、レーザー、スーパーコンピューター、宇宙工学、有人宇宙飛行に焦点をあてた中国の八つの国立研究センターの設立を支援した。ほどなく中国は、一万を超すプロジェクトで著しい進歩を遂げた。それらは中国のマラソン戦略にとって極めて重要なものだったが、西側諸国の支援がなければ、到底なし得なかったはずだ」。

いまや「人民解放軍には 16 のスパイ活動部門があり、『サイバー・ベネトレーション（コンピューターの弱点の発見）サイバー諜報活動、電子戦に専念している』。（中略）侵入されたシステムには「パトリオット・ミサイル・システム、イージスミサイル防御システム、F／A18 戦闘機、V－22 オスプレイ、沿海域戦闘艦」が含まれていた」。

そしてピルズベリーは、中国が今や金融覇権も含めて、全世界を共産主義の支配下に置こうとする、諜報関係から明確に発覚した、しのび足で勢力を拡大させる「マラソン戦略」の全貌について、その著書で詳しく語っている。　（ピルズベリー、2015、109 - 123、225 - 238）

しかし、共産圏と自由世界圏の奇妙で不可思議ななれあいが、現在も続いていることも事実である。裏の裏の、そのまた裏がある可能性も存在する。だからこそ、総合的に読み解く力量を私たちは養うのだ。手嶋龍一は、このように提言する。

「まさに「インテリジェンスに同盟なし」です。ですから私は、安全保障分野では日米同盟の強化が必要なものの、ことインテリジェンスに関しては、米国に依存しない独自の能力を高めるべきだ考えています」。

早急に新自由主義の施策をゆるめて、若い世代に活力を取り戻し、明治・大正・昭和の先人たちと同様の高度な、情報分析のすぐれた感性を、早急に取り戻していくことである。

この当たり前のことを、私たちの立ち位置を考える素材とするため、最終章でマイケル・ピルズベリーの著書の内容にもあえてふれた。

私たちのクニが道具（オモチャ）にされないように、しっかりと見据えている、良質のヒト

クサ（国民）がまだ多数存在している。私たちは、縄文時代からの大文明を今も紡ぎ続けているのだ。高潔な精神文化である「スズカ（欲しを去る）のミチ」も、有事の際の北条時宗と武士団の果敢な決断と展開の応用力も、今も無意識に私たちの DNA に生き続けている。

むすび

以上、『記紀』の叙述の原典（元史料）である『ヲシテ文献（ホツマツタヱ、ミカサフミ、カクのミハタ）』の、縄文時代からの宮中の祭祀と伝統儀礼、及び大宇宙哲理体系の特色の、ごく一部を紹介した。

京都大学の梶慶輔たちが指摘するように、『ヲシテ文献』というわが国の大文明を朗詠する貴重な古文書が、「学問的に研究されておらず、日本語の歴史や日本史全般の研究を妨げていることは誠に重大である」。（梶、2016、378）

そして参考の視角として、戦後の 1945 年から始まる GHQ による日本の《国体と精神》の改悪と、第二段の 1980 年代後半からの「日本経済の失われた 30 年」に至る、新自由主義流の《社会・経済制度》改悪の、壮大な因果メカニズムの経緯をたどってみた。

この論考は、わが国の次の世代が、失われつつある、縄文時代から続く「本当の日本文明」の叡智を回復する潮流を目指し、思うところを刻印したものである。

1985 年 9 月の「プラザ合意」など、終始一貫して日本は、米国に協力してきた。当時盛んだった品質管理の TQC 運動で蓄積した、自動車産業・半導体などの最先端技術を、米国の復活になればとやむを得ず渡してきた。

それでもまだ、わが国への収奪の手を緩めず、縄文時代以来、共に喜々と生きてきた社会経済の淵源、すなわち《コミュニティ》存立の基礎たる「ゆりかご＝社稷」、「ヲヲヤケ（公）」の制度までがさらに蹂躙されてきている。

人間の尊厳と自由を奪う共産主義も脅威だが、《人類の「ゆりかご」》を日々壊していく、唯我独尊の、同根でもある国際主義・新自由主義流の思惟も、同様に脅威である。

働き口が少なくなった日本の若者たちが、『ヲシテ文献』の歴史を含んだ、本物の「日本語の全体像」と精神的バックボーンを自ら学び直すという、ポテンシャルな国家の基盤の再構築は、今後の雇用の拡がりと合せて、私たちに課せられた大事な仕事でもある。

現在の知的状況として、祖国の歴史の始源を、古代シナ文明のいわば附録のように扱う悪しき慣習は、じつは戦後の GHQ に始まり、哀れにもいまもって克服できない、歴史学会及び文科省の自虐的歴史教科書の陥っている宿痾（しゅくあ）のひとつと考えてよい。そこまで日本人の頭脳は、意図的に今も劣化され続けているように見える。

GHQ によって大東亜戦争が、太平洋戦争と言い換えさせられるなど、日本人の「物語」が消され、アメリカ（筆者注：金融石油財閥）が発明した、アメリカに都合のいい歴史や文化に取って替えられた今日の言語空間を（江藤淳は）「閉された」と呼んだのである。

西尾幹二が世に問うた七千七百余点の GHQ の「焚書」ほど、「閉された言語空間」を外した外の世界の広さの真実と、底深さをありありと示すものはない。その広さを知り、底深さに真に思いを至さない限り、日本が一人前の当たり前の国家として、立ち直るよすがを手にすることは決してできない。　（西尾、2005＝2018、286‐288、677‐685）

経済人類学のカール・ポランニーたちが洞察したように、コミュニティは互酬性、市場は貨幣を媒介とする交換、国家は再分配をそれぞれの原理としてきた。《全体社会》は、すべての国

民の様々な活動の「ゆりかご」である。市場競争というものは、市場原理にのらない、「コミュニティ」という「ゆりかご」の安定性によって、かろうじて維持され、存在できてきた。それを壊すことは許されることではない。
（付記：本稿は筆者の個人的研究及び見解に基づくものであり、天理大学アメリカス学会の見解ではないことを申し添える）

【主要参考文献】

朝倉慶（2010）『裏読み日本経済　本当は何が起きているのか』徳間書店
・・・（2019）『アメリカが韓国経済をぶっ壊す！』ビジネス社
アレックス・アベラ（2008）『ランド　世界を支配した研究所』牧野洋訳、文藝春秋
池田満（2001）『『ホツマツタエ』を読み解く』展望社
・・・（2002）『定本ホツマツタエ　日本書紀・古事記との対比』松本善之助監修、展望社
・・・（2020a）『ホツマ辞典　改訂版』展望社
・・・（2020b）『文献の把握の枠組みの認識を変更して頂くお願い』日本ヲシテ研究所
・・・（2021a）『ヲシテ文献の栞　ファースト・コンタクトのために』日本ヲシテ研究所
・・・（2021b）『ホツマ　日本の歴史物語１　「アワウタ」の秘密』展望社
・・・（2021c）「京都　ヲシテ講習会第 68 回『ホツマツタエ』13 アヤ（ワカヒコ　イセスズカのアヤ）
池田満・辻公則（2021a）『記紀原書ヲシテ　増補版　上巻』展望社
・・・（2021b）『記紀原書ヲシテ　増補版　下巻』展望社
伊東光晴（2006）『日本経済を問う』岩波書店
内橋克人編（2002）「構造改革はすでに破綻している」『誰のための改革か』岩波書店
江藤淳（1989）『閉ざされた言語空間』文藝春秋
M. Stanton Evans & Herbert Romerstein （2012）, *STALIN’S SECRET AGENTS:THE SUBVERSION OF ROOSEVELT’S GOVERNMENT,* Threshold Editions, New York ,
大村大次郎（2017）『世界が喰いつくす日本経済』ビジネス社
ジュリア・カジェ（2015）『なぜネット社会ほど権力の暴走を招くのか』山本知子・相川千尋訳、トマ・ピケティの「メディアを救え」の論考付き、徳間書店
梶慶輔（2016）「日本神話のルーツ：ホツマツタエ」『繊維学会誌　第 72 巻第 8 号』
・・・（2020）「日本最古の暦：スズ暦とアスス暦の仕組」『海洋化学研究　第 33 巻第 1 号』
加瀬英明・藤井厳喜・稲村公望・茂木弘道（2016）『日米戦争を起こしたのは誰か　ルーズベルトの罪状・フーバー大統領回顧録を論ず』勉誠出版
金子善光（2012）「祝詞の仮名について」『延喜式祝詞の研究』大河書房
鎌田純一（2003）『平成大禮要話　即位禮・大嘗祭』錦上社
鎌田純一・上田正昭（2004）『日本の神々　『先代旧事本紀』の復権』大和書房
川瀬一馬（2019）「徳富蘇峰旧蔵『成簀堂文庫善本書目』の序文」「金沢文庫の和漢典籍蒐集」『日本における書籍蒐集の歴史』吉川弘文館
川出清彦（1990）「鎮魂祭古儀考」『大嘗祭と宮中のまつり』名著出版
吉川元忠（1998）『マネー敗戦』文春新書
木村大樹（2019）「大嘗祭の神饌に関する一考察」『神道史研究　第 67 巻 2 号』神道史学会
ナオミ・クライン（2011）『ショック・ドクトリン　惨事便乗型資本主義の正体を暴く』幾島

幸子・村上由見子訳、岩波書店
栗本慎一郎（1979＝2013）『経済人類学』講談社学術文庫
・・・（2005）『パンツを脱いだサル』現代書館
シオドーラ・クローバー（1961＝2003）『イシ　北米最後の野生インディアン』行方昭夫訳、岩波書店
皇室辞典編集委員会編（2019）『皇室辞典　令和版』KADOKAWA
小林喜光（2019）『危機感なき茹でガエル日本　過去の延長線上に未来はない』中央公論新社
小堀桂一朗＆中西輝政（2007）『歴史の書き換えが始まった　コミンテルンと昭和史』明成社
歳川隆雄（1991）『ブッシュ　アメリカ情報操作の脅威』講談社
・・・（1995）『大蔵省　「権力の秘密」』小学館
佐伯啓思（2012）『経済学の犯罪　希少性の経済から過剰性の経済へ』講談社
・・・（2015）『従属国家論　日米戦後史の欺瞞』PHP 新書
桜井よしこ（2002）『GHQ 作成の情報操作書「真相箱」の呪縛を解く』小学館
・・・（2013）『日本よ　歴史力を磨け　現代史の呪縛を解く』文藝春秋
Antony Sutton、（1974） *Wall Street And the Bolshevik Revolution* Buccaneer Books
・・・（1975） *Wall Street and FDR*　Buccaneer Books,　New York
佐藤早苗（1995）『東條英機　封印された真実』講談社
リチャード・J・サミュエルズ（2020）『特務　日本のインテリジェンス・コミュニティの歴史』小谷賢訳、日経 BP
アンソニー・サンプソン（1976）『セブン・シスターズ　不死身の国際石油資本』大原進・青木栄一訳、日本経済新聞社
塩川哲朗（2020）「大嘗祭における御饌供出の構造」『神道史研究　第 68 巻 1 号』神道史学会
塩田潮（1994）『大蔵省 VS アメリカ　仕組まれた円ドル戦争』講談社
エンマニエル・M・ジョセフソン（1948＝1989）『ロックフェラーがアメリカ経済をダメにした』馬野周二訳、徳間書店
白山芳太郎（2003）『賀茂社と貴船社　皇學館大學講演叢書　第 111 輯』
神宮司廳編（1914＝1977）「貞享四年　大嘗會圖」『古事類苑　神祇部一　大嘗祭』吉川弘文館
神道体系編纂会（1980）『先代旧事本紀　神道体系古典編八』西田長男他監修、神道体系編纂会
ロバート・B・スティネット（2001）『真珠湾の真実』妹尾作太男監訳、文藝春秋
関岡英之（2004）『拒否できない日本　アメリカの日本改造が進んでいる』文藝春秋
関岡英之＆吉川元忠（2005）『国富消尽　対米隷従の果てに』ＰＨＰ研究所
副島隆彦（1998）『日本の危機の本質』講談社
・・・（2002）『金融鎖国　日本経済防衛論』祥伝社
・・・（2020）『金とドルは光芒を放ち決戦の場へ』祥伝社
ヴェルナー・ゾンバルト（1913＝1996）『戦争と資本主義』金森誠也訳、論創社
田中宏巳（2014）「CI&E の『太平洋戦争史』と「真相箱」」『消されたマッカーサーの戦い　日本人に刷り込まれた〈太平洋戦争史〉』吉川弘文館
千葉富三（2018）『甦る古代　日本の原典　ホツマツタヱ（秀真伝）』明窓出版
手嶋龍一＆佐藤優（2008）『インテリジェンス　武器なき戦争』幻冬舎新書
天理図書館善本叢書編集委員会編（1978）『先代旧事本紀』八木書店

・・・(2015)『古語拾遺』八木書店
カーチス・ドール（1991)『操られたルーズベルト』馬野周二訳、プレジデント社
中田安彦（2009)『アメリカを支配するパワーエリート解体新書』ＰＨＰ研究所
中山智香子（2010)『経済戦争の理論　大戦間期ウィーンとゲーム理論』勁草書房
・・・(2013)『経済ジェノサイド　フリードマンと世界経済の半世紀』平凡社新書
西尾幹二（1999＝2017)「国民の歴史」『西尾幹二全集　第十八巻』国書刊行会
・・・(2005＝2018)「歴史教科書問題」「知られざる GHQ の「焚書」指令と現代の「焚書」」『西尾幹二全集　第十七巻』国書刊行会
・・・(2011)『GHQ 焚書図書開封５　日米百年戦争ハワイ、満州、支那の排日』徳間書店
・・・(2013)『GHQ 焚書図書開封８　日米百年戦争　ペリー来航からワシントン会議』徳間書店
西山徳（1989)「大嘗祭の思想的源流と古代伝承」『続　大嘗祭の研究』皇學館大學出版部
野口悠起雄（2019)『平成はなぜ失敗したのか　失われた 30 年の分析』幻冬舎
モンゴメリー・ハイド（1979)『3603 号室』赤羽龍夫訳、早川書房
橋本尚（2007)『2009 年　国際会計基準の衝撃』日本経済新聞出版社
浜田和幸（2004)『ハゲタカが嗤った日　リップルウッド＝新生銀行の「隠された真実」』集英社インターナショナル
原田武夫（2005)『騙すアメリカ　騙される日本』筑摩書房
・・・(2006)『「NO」と言える国家　奪われ続ける日本の国富』ビジネス社
ジェームス・バーロフ（1992)『権力の影　外交評議会ＣＦＲとアメリカの衰退』馬野周二解説・訳、徳間書店
マイケル・ピルズベリー (2015)『China　2049　秘密裏に遂行される「世界覇権 100 年戦略」』野中香方子訳、森本敏解説、日経 BP 社
広瀬隆（2002a)『世界金融戦争』NHK 出版
・・・(2002b)『世界石油戦争』NHK 出版
・・・(2017)『ロシア革命史入門』集英社
ジェイムズ・ファローズ（1989)『日本封じ込め』大前正臣訳、TBS ブリタニカ
ハミルトン・フィッシュ（1976＝2014)『ルーズベルトの開戦責任』渡辺惣樹訳、草思社
パトリック・J・ブキャナン (2012)『超大国の自殺　アメリカは 2025 年まで生き延びるか？』河内隆弥訳、幻冬舎
ジョン・アール・ヘインズ＆ハーヴェイ・クレア（2010)『ヴェノナ　解読されたソ連の暗号とスパイ活動』中西輝政監訳、山添博史、佐々木太郎、金自成訳、ＰＨＰ研究所
保阪正康（2003)『日本解体　『真相箱』に見るアメリカ GHQ の洗脳工作』扶桑社
カール・ポランニー（2009)『大転換（新訳)』野口建彦・栖原学訳、東洋経済新報社
Ｊ・マクナマス（1993)『見えざる政府ＣＦＲ　ホワイトハウスを操る司令塔』湯浅慎一訳、太陽出版
溝口郁夫（2009)「侵略や侵略戦争の語はいつ誰によって使われだしたのか」『GHQ 焚書図書開封３』西尾幹二編著、徳間書店
水野隆徳（1998)『日本壊滅　ビッグバンの正体は第二の占領政策だった』徳間書店
エドワード・ミラー（1994)『オレンジ計画　アメリカの対日侵攻 50 年戦略』沢田博訳、新潮社

・・・(2010)『日本経済を殲滅せよ』金子宣子訳、新潮社
本山美彦（2006)『売られ続ける日本　買い漁るアメリカ』ビジネス社
・・・(2007)『姿なき占領』ビジネス社
桃裕行（1990)「日本長暦の影響と価値」『暦法の研究（下）　桃裕行著作集　第８巻』思文閣出版
森田成男（2020)「『ホツマツタヱ』と古事記、日本書紀の内容を対照、1300 年の封印を解く」『「後集団」概念と汎神論（広義の神道）の射程』『アメリカス研究　第 25 号』天理大学アメリカス学会編
・・・(2021a)「縄文「火焔型土器」と会津大塚山古墳などを『ヲシテ文献』史料から読み解く」　日本ヲシテ研究所の「縄文文字ヲシテを復活Ⅱ」サイトに寄稿・公開
・・・(2021b)「フェノロサの洞察、野口米次郎・高浜虚子から『ヲシテ文献』のヤマトコトバを考える」　日本ヲシテ研究所の「縄文文字ヲシテを復活Ⅱ」サイトに寄稿・公開
・・・(2021c)「『風土記』・『高橋氏文』と、『ヲシテ文献』との接点を考察する」　同・公開
・・・(2021d)「『ヲシテ文献（ホツマツタヱ他)』、『暦林問答集』、『日本長暦』、『塵劫記』」（関連する『ミカサフミ』タカマナルアヤの叙述にも言及の論考）　同サイトで公開
・・・(2021e)「法制史の視角から『ヲシテ文献』、『延喜式』他を考察する」（関連する第 23、24 アヤの叙述にも言及の論考）　同サイトで公開
・・・(2021f)「『ヲシテ文献（ホツマツタヱ他)』と銅鐸、銅鏡、の相互関係性を読み解く」（関連する第 33～35 アヤの崇神天皇、垂仁天皇の御代の叙述にも言及）同サイトで公開
・・・(2021g)「『ヲシテ文献』、欧州での「神道の研修会」、川面凡児の遺産を共通に貫くもの」（関連する第 13 と 17 アヤの叙述にも言及の論考）　同サイトで公開
山田喜志夫（2008)「国際通貨国特権とアメリカの経営・資本取引」『ドル体制とグローバリゼーション』秋山誠一・吉田真広編著、駿河台出版社
山本武利（2002)「CIA のブラック・ラジオ活動と OSS 資料の公開」「冷戦期のブラック・プロパガンダの研究」『ブラック・プロパガンダ』岩波書店
・・・(2021)『検閲官　発見された GHQ 名簿』新潮新書
ジャック・リュエフ（1973)『ドル体制の崩壊』長谷川公昭・村瀬満男訳、サイマル出版会
K・レーヴィット（1959)「人間の本性と人間性」『世界と世界史』柴田治三郎訳、岩波書店
若狭和朋（2015)『日本人よ、歴史戦争に勝利せよ　GHQ 洗脳史観への決別宣言』成甲書房
渡部昇一（2010)「日本の歴史を奪った占領軍の教育改革」『日本の歴史第７　戦後篇』ワック
・・・・(2016)「神代から続く皇統」『日本の歴史第１　古代篇　神話の時代から』ワック